

イリヤ・プーシキン

誰にも話さないでおきましょう



エルサレム

2012

イリヤ・プーシキン

誰にも話さないでおきましょう



エルサレム

2012

校正：南雲誠一

橋本ひろこ

挿絵：マーシャトゥカチェンコ

装丁：シモーナヴェイスベルグ

目次

青い鳥を追いかけて	5
行ったきりの日本語の授業	20
イスラエルのお医者さんのための日本人の妻	29
上野から蝶々	36
日本語の叙情詩には気をつけよう（危険な詩集の発行）	39
部屋の床に何かある	52
学生の冗談	54
誰にも話さないでおきましょう	55
普通の家族のありふれた物語	62
狂想的な任務	71
東京の法律	102
日本から愛を込めて（翻訳：橋本ひろこ、ヤミン早苗）	108

青い鳥を追いかけて

人が五十の齡を過ぎると、彼のそばにいる心優しい妖精は彼がこの世でしておきたいことを、急いでかなえてあげなければならなくなる。

この歳になると人のしたいことは、若い頃に比べずっと少ないのだが、これらはかなえるのに手間取るものとなっているからだ。

私は五十歳を過ぎている。しかしそれでも、したいことの一つは、かなえられるのだ。わたしは日本へ行くことができる！私は日本が大好きだ。

今度私が日本へ旅行する目的は二つある。一つは、この孤独に終止符を打ってくれる日本人女性を見つけること。もう一つは、私の日本語の詩集を出してくれる出版社を見つけることだ。現在私はイスラエルに住み、医者として働いているが、できれば日本に住んで作家になりたいと思っている。

私はイスラエルで日本語を学んでいる。先生は隣に住んでいる、さだこ、という日本人のおばあさんだ。彼女の重い荷物を運ぶのを手伝ってあげたことが、知り合いになったきっかけだ。後日、彼女は私をお茶会に招待した。そのとき以来、私達はお互いに訪問しあうようになり、気がつくといつもその場は私の日本語の授業になっていた。

私が日本へ旅行することを話すと、「浅草の小さな古い店で、明治時代の青い鳥の絵の扇を買ってきてください。もちろん、お金は払いますから。」とさだこさんは私に頼んだ。その頼みはとても面白いもののように思われた。

*

日本に到着し私は、東京の浅草にある「東京の微笑み」というホテルの部屋を借りた。日本の空気を吸うと私は幸せで胸がいっぱいになる。もしかしたら、日本の空気には、何かこう幸せの分子というものが含まれているのかも知れない。

ホテルで少し休んだ後、浅草の狭い通りを歩き、小さな店を何件も訪れ、さだこさんの頼みの扇を探した。そうするうち、一軒の店のショーウィンドウに変わった目をした招き猫が置いてあるのに気がついた。その招き猫の目は磁石のように私を引き寄せ、私はその店に入った。そこには年配の女店員がいた。売っているものは普通のお土産だけだった。探している扇も、とりたてて面白いものもなかった。ので、私は店を出た。

翌日私がその店の前を通ると、きのうの招き猫が再び私を店の中に引き込んだ。しかしやはり興味を引く物はなかった。ので、私は店を出た。

二日目までに私は、浅草の狭い通りを全部歩いて、ほとんど全ての店を訪ねたが、さだこさんのための扇はみつからなかった。

三日目をさだこさんの扇を探す最後の日とした。再びあの招き猫の変った目を見て、私は店に引き込まれた。その日は年配の女店員の代わりに、少女が店番をしていた。私はその店に置いてある物を、詳しく見て回ることにした。古い扇はみつからなかったけれども、一番高い棚に焼き物の小さい子狐を見つけた。それは昔の中国で作られたものようだった。とてもかわいい子狐だったので私はその焼き物の子狐を買うことにした。

少女に「いくら？」と尋ねると、「えっと・・・おばあちゃんがないから、いくらかちょっとわかりません。でも一万円払ってくれれば、私がおばあちゃんに叱られないですむと思います」と答えた。

小さい子狐の焼き物一個に、一万円はとても高いと思ったが、私は買ってしまった。

店を出てホテルに帰る途中、私の後を女性が追ってきているような気がした。彼女はとてもきれいだった。だからその彼女が私を追ってくるとは信じられなかった。既に白髪の私は、きれいな女性に追われることなど、もうしばらくなかったからだ。

ホテルの部屋で私は、長いこと焼き物の子狐を眺めていた。すると私の心がほっこりと温かくなってきた。子狐を見ているだけでとても嬉しくなった。

*

翌日、私は上野の町をぶらぶらと歩き回った。この日私は「私を追ってくる」あの女性を見かけなかった。

ホテルに戻ると、浅草のあの店の、年配の女店員がロビーで私を待っていた。

「すみません。昨日は間違えてしまいました。私の孫娘はあなたに、売ることができない物を買ってしまったのです。お金をお返ししますので、どうかその焼き物の子狐を返してください」と言って女店員は一万円を差し出した。

「私はこの子狐が好きなので返したくありません。すみませんが、子狐は私のところにおいておきます。」女店員は鞆から更にお金を出して「どうぞ、二万円です。私にはどうしてもその子狐が必要なのです。それは売ってはいけない物だったのです」と言った。

「私は子狐で闇取引のようなことはしません」
すると女店員は鞆から更にお札を出して「どうぞ、十万円です。旅行者にとってはいいお金ですよ。そのお金であなたは歌舞伎町でたくさん楽しむ事もできますからね」と言った。

私は相手にしないことにして、女店員に「さようなら」と言いエレベーターに向った。

女店員は私を追いかけてきて、きつい目をし「最近外国人旅行者が事件に巻き込まれることが増えてきていますよ」と言った。そんな脅しは怖くはなかった。そこまで言うようだ、どうやら私はとても高価なものを手に入れたようだ。

ホテルに戻って部屋のドアを開けると、中から狐が飛び出してきて、私の前を走り去った。私はとても驚いた。何故こんな所に狐が？部屋で狐は何をしていたのだろうか？幸い、部屋の中は荒らされた様子もなく、なくなったものもないようだ。子狐は、私が部屋を出かけた時と同じ所で、薄笑いを浮かべていた。

*

翌日私は二人の人と会うことになっていた。
一人目は里美という女性で、もう一人は出版社の編集長だ。昨日不思議なことがあったので、その日は子狐を懐のポケットに入れて持って行くことにした。里美とは上野駅で会う約束をしていた。
彼女とは長い間インターネットで文通している。里美は独身で私とほぼ同年齢だ。会ってお互い気に入れば、[結婚してもいいな]と思っていた。

写真でしか彼女の顔を見たことがないので、ちゃんと彼女を見つけることができるかどうか、多少不安だった。

約束の11時に私は赤いバラの花束を持って、上野駅の案内所の前で彼女を待っていた。

日本の女性は写真で見るよりも実物の方がずっと美しいと私は思う。

女性が一人私の方にやってきた。里美だ。里美も例外ではなく写真よりずっと美しく、しかも若く見えた。

里美は私の持ってきた花束が気に入ったようだった。頬に軽いキスをしてから喫茶店に入った。五分もすると、かなり打ち解けた雰囲気になっていた。しかし話を進めていくうちに、彼女との関係は私が思っているほど簡単にはいかないことに気が付いた。

里美は「結婚するとしても、どうやって家庭を支えるための収入を得るつもりですか？」と聞いた。

「働くつもりですけど」と私は答えた。

「働くですって？どんな仕事があると思っているんですか？お医者さんだと言っても、日本では簡単には医療関係で働くことはできませんよ。他の簡単な仕事を見つけることは出来るでしょう。でも、掃除のおじさんにでもなって働くつもりですか？そうだとすると、それでは十分な稼ぎを得られません。この歳になるまで私は一生懸命働いてきて、今も働いています。誰も歳を取ってから貧しくなりたいとは思わないでしょう？」

私には答えることが出来なかった。

彼女は続けて「あなたには日本で働く許可は下りないと思います。私の部屋とお金を利用するつもりだったのかしら？」

でも、私にあなたを養わなければならない理由などありません。」

彼女は自分のコーヒー代と私が持ってきた花束をテーブルの上に置いて席を立った。

「さようなら、頭の良い外人さん。今回は良い結果が得られなかったようね」と彼女は笑い、その場を去った。

私は彼女の言葉を思い出し悲しくなり何故、私は日本へ来たのだろうかと思問した。

夢は叶わなかった。しかし、悲しんでいる暇はなかった。出版社に急がなければならないのだ。出版社は本郷にある。

湯島の狭い通りを歩いていると、突然青い鳥が目に入った。私の目の前を青い鳥は、右へ左へと飛び移っていく。時間は無かったのだけれども、鳥が私に道を示しているように思え、その青い鳥の後についていくことにした。

青い鳥は私を小さな神社の境内へ導いた。

そして開いていた戸からお社の中に飛び込んだ。私もそのお社に入ることにした。驚いたことにそこにはさだこさんがいた！正座をしてお茶をたてていたのだ。

彼女は私を見ることなく言った。「驚いたでしょう。一つだけ私はあなたの質問にこたえることができます。だから一番重要だと思ふことを質問してください。」

私の頭にきつねの姿がゆらりと浮んで消えた。

「狐は私の部屋で何をしていたのですか？」

「良い質問ですね。あの狐は自分の子供にお乳をあげていたのです。さあ出版社へ急ぎなさい。何か問題があったときにはこれを握り締めなさい。」そう言ってさだこさんは私に小さなお守りを手渡した。

考える時間もなく「どうもありがとうございます」とだけ
いって私はお社をでた。

出版社へ行く途中、私の頭はすっかり錯乱状態になっていた。狐が自分の子供にお乳をあげていただって？

しばらくしてやっと私は「夜明けの星」という出版社に着いた。

受付の女性に「こんにちは。12時に編集部的小林さんと面会の約束をしているのですが・・・」と言うとその女性は「小林編集長、外国人の方がいらっしゃいましたけど、お通ししますか？」と奥の方へ声をかけた。

「ああ、入ってもらいなさい」との返事が聞こえ、私は部屋へ案内された。

小林編集長は背の低い禿げた男性だった。彼は大きな机の後ろに座っていた。そして私を見るなり「あなたの詩ですけどね、何か変ですな。あれが詩だとでも言うんですか？気に入りませんな。全く箸にも棒にもかからぬものですよ。まず日本語を勉強してください。ええと、どこにあれをおいたんだっけ？」そうやって机をひっかき回した。

「ゴミ箱に捨ててしまったかな？」

私はぎょっとした。これで私の詩人としての人生は終わってしまったのだ、と思った。

「私はとても忙しいのでお引取り下さい。イスラエルにお帰りになったほうがいいですよ。そんな変なものを書いて日本に持って来るより、これまでのお仕事を続けたほうがベターと思いますけどね」と小林編集長は言った。

部屋を出ようとして私は、さだこさんがくれたお守りを思い出した。ポケットをまさぐり、お守りを握り締めた・・・するとすぐに、「ちょっと待ってください。申し訳ありません、別の詩人と勘違いをしていました。どうかお戻りになってください！」と小林編集長は椅子から立ち上がって、満面に笑いを浮べて言った。

「あなたの詩に感動しましたよ。すばらしい詩ですね。あなたは大した詩人です。初めてですよ。外国人によって書かれた日本語の素晴らしい詩を読んだのは。すごいですね！あなたの詩をわが社の出版計画に入れました。さっそく来月印刷しますよ。良く売れると思います。また別の詩ができれば、すぐに送ってください。あなたの詩は全部、すぐ印刷しますから。」

私は里美と会ったときに、このお守りが無かったのが残念だと思った。

出版社を出ると、気持ちがとても軽くなっていた。まるで私の背中に翼がはえているかのようで、幸せだった。

ちょうど天気もよかったので、美しい景色があるところを散歩することにして明治神宮へ向った。

電車に乗っていると上着のポケットの中で何かが動くような感じがした。手を入れてみると、焼き物の子狐が、あたかも生きているかのようなぬくもりを持っていた。

私は明治神宮前駅で電車を降り、駅の建物を出た。すると、浅草の店からホテルに帰る途中、私を追って来たと思った女性が私のほうにやってきた。

私にお辞儀をして「こんにちは。私はいずみと申します。すみませんけれど時間なので、そこにいる私の子供にお乳を与えたいのですが、よろしいでしょうか」と、彼女は切に私に頼む。

「あなたの子供ですって？どこにいるんですか？」

再び何かがポケットの中で動いた。ポケットから子狐を取り出してみると、子狐は生きていて「キューキュー」と鳴いた。

私が驚いていると、子狐は私の手をすり抜けていずみの手の中に飛び込み、泣いている赤ちゃんに変わった。泉がやさしい声でなだめると、赤ちゃんはふと泣き止んだ。

いずみは辺りを見渡し、小さな喫茶店を見つけ、近寄っていった。私も彼女の後を追ってその店に入った。

喫茶店のなかにはお店のおばあさんの他には誰もいなかった。いずみは一番奥の席で入口に背を向けるようにして座った。私はおばあさんにコーヒーのケーキセット二人分を注文した。

*

私達はその喫茶店から出たときには、母親もお腹がいっぱいになった赤ちゃんも落ち着いていた。でも、私は頭がすっかり混乱して、ちっとも落ち着かなかった。

はっきりさせなければならないことが沢山あった。「いったいどうなっているのか全然わかりません。説明してください。どうしてあなたは私を追いかけたのですか？どうして焼き物の子狐があなたの赤ちゃんに変わってしまったのですか？いったい私は何をしたらよいのでしょうか？」

彼女はうつむいて黙っていた。私達は歩き、ある高い建物の近くにきた。そこでいずみはやっと口を開いた「本当に申し訳ありません。私はあなたを面倒なことに巻き込んでしまったようです。もしあなたがあの焼き物の子狐を買わなかったら、落ち着いて日本を旅行することができたでしょうに。でも、今は私達にゆっくりしている時間がありません。彼は私達を殺すために殺し屋を送りました・・・」

「彼って誰？」

いずみが答える間はなかった。二台の大きな黒い車が私達の近くに停まり、中から数人の男達が降りてきた。

それを見たいずみは「早く！」と言って、赤ちゃんをしっかり抱き、その高い建物の入り口へ走った。私は彼女を追いかけた。

制服を着た人が「入場券をお願いします」と言った。私は入場券売り場の窓口に向かった。その時、建物からたくさんの若い女性が楽しそうに話をしながら出てきた。同時に、後ろからさっきの男達が近づいてきた。私達はチケットを買わずに、その女性達をかきわけて建物の中へ入った。

ここはテレビ局だったそして長い廊下とたくさんのスタジオがあった。

私達はスタジオの一つに入り込んだ。そこには大勢の侍の格好をした男たちがいたので、ここでは時代劇の撮影をしているのだ、とわかった。髪を白く染めた若い男が私達に近寄ってきて、「遅すぎるぞ。皆、お前さん達を待っていたんだ。早く撮影用の衣装に着替えて来い！」と言った。

その人は右の耳にイヤリングをしていたので、同性愛者のように見えた。

私達はスタジオの奥にある着替えの部屋に入った。すると女性達が私に侍の着物を着せ、私の顔に化粧を施した。しばらくすると、私といずみは着物を着た侍の夫婦になっていた。赤ん坊を抱える着物姿のいずみはとてもきれいだった。

私達の周りを数人の侍が囲んで立った。

同性愛者のような男は私に、「集中するんだ。この映画ではな、外国人のあんたが、皇子さまを守ることになっているんだ。だからあんたはその役目の重さを感じてなければならぬんだ」と言った

そのとき、私達を追っていた男達が部屋に入ってきた。私といずみは侍夫婦になっていたのに、彼らには私達がすぐにわかった。彼らの一人が「そこだ！皇子のとなりにいるぞ。あいつらを捕まえろ！」と怒鳴った。さて、なんとかしなければならぬ。

私はさだこさんのお守りを握り締めて「侍たちよ！皇子さまを守ってくれ！」と叫んだ。すると、スタジオの中にいた侍全員が刀を抜いて、私たちを追ってきた男たちに攻めかかった！その隙に私たちはスタジオからほうほうの体で逃げ出した。

＊

私たちは渋谷駅に向った。珍しい格好の組み合わせのカップルが関心を引くのだろうか、行く途中たくさんの人が私たちの方へ振り返った。車に乗っている人の中にも、速度

を落として窓を開けて私たちのほうを見つめている人々がいた。確かに私たちは変なカップルだった。年をとった侍姿の外国人が着物を着た女性と子供を連れて歩いているのだ。

突然一台の大きな車が私たちの近くに止まった。車から数人出てきて私たちを囲んだ。男性の一人はテレビカメラを構えていた。

若い女性がカメラに向かって話し始めた「渋谷からの生放送です。今まるでタイムマシンを使って鎌倉時代から逃げてきたかのような人達があります。彼らが何をしているのか聞いてみましょう。」そして彼女は微笑ん私にマイクを差し向けた。「すてきな着物を着ていらっしやいますね。ここで何をしているのでしょうか？」

「鎌倉時代に明治神宮を見つけることができなかつたので、この時代にそれを探すことにしたのです」マイクをもった女性は私のユーモアが気に入ったらしく、さらに微笑んで「こちらは奥さんとお嬢さんですか？」と尋ねた。

私はいずみを見て言った「私の妻と子供です。」

「かわいいお嬢さんですね。ところで、あなたは俳優なのですか？」

「いいえ、俳優ではありません。イスラエルから来た日本びいきの詩人です。来月「夜明けの星」と言う出版社から私の詩集が発行されます。」

「詩人なのですか？ではあなたのお気に入りの詩を一つ紹介してください。」

「では

今日あなたは間違えて
ご飯の代わりに
弁当箱に口付けを詰めた。
可愛い間違いのために

私の心はあなたの愛で
満腹だ
けれども、
私のお腹はすいている。」

「とても面白い詩ですね。多くの日本の皆さんがあなたの詩集を買って読んでくれるといいですね」と女性アナウンサーは言った。

*

私たちがインタビューをしようとするテレビ局の人々の手から逃れて走っていると、ぱったり里美に出会った。里美はいずみを見て驚いた様子だった。

里美は「そんなうそつき、信じないほうがいいわよ。彼には知り合いの女性がたくさんいて、別れた妻と赤ちゃんまでいるんだから。私にも結婚の申し込みをしたしね」といずみに言った。

いずみはにこっとして言った「心配してくれてありがとう。でも、もう心配しなくていいのですよ。もうあなたは彼と関係がなくなったのだから。彼は私のものです。」

*

里美が去ると、いずみは「あなたのおかげで問題が解決しました。これで私達は幸せになることができます。今、私はあるところへ行かなければなりません。あなたは上野公園にある五條天神社へ行ってください。あとでホテルで会いましょう」と言って彼女はその場を立ち去った。

一人残された私は「なぜその神社へ行かなければならないのだろう？」と思った。しかし、他には何も思いつかなかったので、その神社に行くことにした。

五條天神社の狐の像の前には神主さんが一人いた。神主さんは厳しい顔つきをしていた。

神主さんは私に言った「あなたには真実を告げなければなりません。」

「真実ですか？私の周りで起こっていることを説明してくれるのですか？」と私は尋ねた。

神主さんは私の目を見ながら、うなずいた。

私も神主さんの目を見て、うなずいた。

神主さんは話し始めた。

「私は大きな過ちを犯してしまいました。私は狐に誘惑されて、狐と同衾してしまっただけです。そしてその狐は身ごもり、子供を産みました。私はその罪を隠すために生まれた子供にまじないをかけ、焼き物の像にしてしまったのです。

あなたがその焼き物を手に入れたとき、私はあなたと狐とその子供を亡き者にしようと思いました。しかし、先ほどあなたは、彼女と子供はあなたのものであるとみんなの前で言いました。

だから、彼女の問題は私から離れてあなたのものとなったのです。あなたが彼女を娶って自分の家族として責任を持つのであれば、どうぞお幸せに。」

神主さんはあるものを私に手渡した。それは青い鳥が描かれている扇だった。

「これを狐の母親に持って行きなさい」と神主さんは言った。

「狐の母親？」

「あなたにその扇を依頼した人物のことです。彼女は娘を助けるためにあなたをここに送り込んだのだ。あなたはその務めを果たしきった。その報酬を受け取るとよいでしょう。」

*

私といずみのエルサレムでの結婚式は一風変わっていた。花嫁が子供を抱いていたことと、雲ひとつない青い空だったのに、雨が激しく降っていたことである。

行ったきりの日本語の授業

1.

私はロシアからここに来たとき、自分の専門分野の仕事を見つけることができなかった。イスラエルでは日本語の研究はちょっと特殊な分野であった。数ヶ月の職探しの後、自分の専門とは全く関係ないと思える、警察での仕事を見つけたことができた。

最初は交通整理の職務から始まった。

三週間経った後、私は二度とこんな仕事はやりたくないと思うようになっていた。

上司に「私にはこの職務を続けることはできません！」と言った。

ふと上司は私の顔を見て微笑んでいった。「確か君の専攻は日本語だったよな？」

「はい、そうですが」と私は答えながら、それがどうかしたのだろうかと思った。

「パヴリク！」と彼は誰かを呼んだ。

すぐに背の高い大柄な若い警官が近くに現れた。

「この“日本人”に例の事件を説明してやれ」と、上司は言った。

「君はもう少しがんばれば、予審判事になれる。もちろん、もっと勉強しなければならないけれどな。」と、彼は私に言った。

このパヴリクとは、スポーツジムで顔見知りであった。私達は彼の部屋に行った。

「コーヒーでもいかがですか？」と、彼は聞いた。コーヒーメーカーから彼が私にコーヒーを注ぎ、私がコーヒーを飲み始めると、彼は事件について話を始めた。

[大学の学生達がいなくなっている。ここ半年で六人失踪した。男性も女性もいるが、彼らに共通するのはみんな日本語を専攻していた点である。

最初はだれもいなくなったことに気を止めていなかった。単なる若者の気まぐれ程度に思っていた。でも彼らの蒸発後何ヶ月か過ぎて、親戚や友達が心配し始めた。]パブリクは六人の若者の写真をテーブルの上に置いた。私は写真をよく見ることにした。

手がかりとなるものはなく、共通点としては、ある若い日本の女子学生からプライベートレッスンを受けていたことぐらいだ。

そしてパブリクは私に、“日本語のレッスン”のお知らせを見せた。「みえこ」と書いてあるのが読めた。

「私たちは自分達の仲間を、彼女のもとへ”日本語を勉強させるために“送る事にした。あなたは日本語ができるので、その役に適している。何がおきているのか調べてきてほしい。」とパブリクは話した。

2.

きれいな色の浴衣を着た若い女性が、私のために戸を開けた。多分美人とはいえない女性だけど、彼女にはある魅力が感じられた。小さく礼をして、「どうぞ、お入りください！」と彼女は言った。私は「おじゃまします」と言いたかったけど、「シャロム！」とヘブライ語で答えた。「私は日本語ができないんだった！」と、ちょうどその時私は思い出していた。

「みえこです」と彼女は自己紹介した。「そちらへどうぞ」と部屋を指した。

彼女の部屋は和室ではなかったけれど、茶の湯のために用意された道具があった。「たいてい私は茶道から私の授業を始めるんです」と女性は言った。低い椅子を指して、「そこにおかけください」と彼女は言った。

みえこさんは黙ってゆっくりと茶道の儀式を行っていた。やがて彼女はお茶の入った茶碗を差し出し、微笑みながら「どうぞ」と言った。

「どうもありがとうございます」と私は言った。茶の湯の精神的な本質の深さに強く影響されてしまったので、私は警察の任務を忘れ、つい日本語で話してしまった。

お茶を少し飲んだとき、突然みえこさんの部屋がなくなり、気がつくと私はある知らない街の通りに立っていた。ガラスと鉄で作られた高層ビルのネオンサインには「銀座」と書いてあった。私は東京の通りに立っていた！私の周りでたくさんの日本人が、忙しそうにどこかへ急いで歩いていく。突然誰かが私を呼んだ。後ろを向くと、そこには六人のいなくなった若者たちがいた。

「あなたたちはここで何をしているんだ？」と私は聞いた。「知りたかったら、一緒に来ればいい」と彼らは言った。

私が彼らについて行こうとした瞬間、私は再びみえこさんの部屋にいるのに気がついた。私が考えをまとめることができないでいるうちに、

「授業を始めましょう。」と、彼女は微笑みながら言った。

「これは鉛筆です。」と、みえこさんは鉛筆を取り上げていった。

ずっと昔に私が日本語を習い始めたときと、まったく同じ文だった。

どうして日本語の先生は鉛筆が好きなのだろうか？
私たちの授業は問題なく進んでいった。私は優秀な生徒だった。
みえこさんは何回も、「よくできました！」と私に言った。私は嬉しかった。
授業が終わって部屋から出ようとしたとき、私は棚の上にあるいくつかの面白い根付に目を留めた。私はその根付を見つめているうち、その根付がいなくなった学生たちの顔に似ていることに気がついた。
戸を開けてみえこさんは、「お疲れ様でした！」といいながら会釈をした。

3.

署に戻りなにがあったかをパブリクに報告すると「幻覚か？」とパブリクは言った。
「多分、彼女はお茶に麻薬でも入れたのだろう。東京へのトリップは楽しかったかい？」と、パブリクがからかう調子で言った。
私は黙ってパブリクにあるものを渡した。それは、私が“東京にトリップ”したときにそこで拾った“マイルドセブン”の空き箱だった！

4.

疑問と謎が増えたけれど、取調べは進んでいないようだ。
みえこさんが借りたアパートのオーナーもいなくなったという事がわかった。毎月みえこさんは彼の預金口座に家賃を振り込んでいるけれど、もう長い間、誰も引き出していない。アパートのオーナーは、日本で外交官として働いていた。三年前イスラエルに帰った後、いなくなった。しか

し彼には親戚がなかったので、誰も彼の蒸発に気がつかなかった。

私達はみえこさんのアパートを調べることにした。そのアパートには三つの部屋があった。客間とみえこさんの寝室のほかにもう一つ、常に鍵のかかっている部屋があった。授業は客間で行われ、ほかの部屋には入ることができなかった。

「明日みえこさんが大学に行ったら、私は彼女のアパートを調べることにする」と、パブリクは言った。それは合法的ではないけれど、いなくなった人を見つけるためにはそれもやむを得ないだろう。

翌朝パブリクはそのアパートに行ったあと、そこから戻らなかった。彼の携帯電話も繋がらなくなった。彼は家にも帰らなかった。

パブリクもいなくなった。

その晩私が日本語の授業に行くと、もう一つの根付が棚の上にあるのに気がついた。その根付の顔はパブリクが驚いている顔であった！

5.

私はみえこさんにこのことを問い詰めなければならない。

私は振りかえってみえこさんのほうを見た。

今日彼女は白いブラウスにジーンズを着ている。

「この根付は何ですか？！この人は誰ですか？！」と私は問い詰めようとしたけど、そんな姿彼女に魅了されて黙り込んでしまった。

彼女のかわい微笑と、もろい姿は絶対的無罪を示している。

もちろん、彼女はその失踪事件についてはなにも知らないだろう。

彼女にそのことを聞いても意味はないだろう。

「冷たい飲み物を飲みたいですか？」と彼女はしなを作って微笑んで聞いた。

「いいえ、結構です」と私は答えた。まだ私は例の茶の湯の幻覚の件を覚えている。

不意に彼女にキスをしたいという強い欲求が私を襲った。その手の男性の欲求には、女性は敏感で鋭く察知する能力があるのだろう。みえこさんは私に近寄って私の腕をやわらかくつかんだ。私は思わず彼女を抱きしめた。そのとき部屋が回り始め、全てが幾千万もの光となって弾け飛んだ……

意識が回復したとき、私はとある和室にいた。そこにはいなくなった学生とパブリクもいた。彼らのほかに紅白の和服を着けた神主らしき人物もそこにいた。

床の間には大輪の真っ白な菊と真っ赤な椿が一見無造作、しかし部屋に調和するように活けてあった。

神主は「煩惱から解放されるために強い精神の集中が必要だ」といった。「至高の領域に到達するためには」。

そのとき突然神主や学生達の姿が消え始めいなくなってしまった……

何事もなかったかのように、みえこさんは授業で「この原則を次回までに身につけておいてください！」と言って授業を終わらせた。

6.

この件はとても複雑なので、鋭い洞察力のある人に相談することが必要だ。

シモニー先生は、イスラエルで一番有名な日本学の専門家だ。その方は唯一私を単なる警官として扱わず、いつも同業者として敬意を払ってくれた人物である。

シモニー先生のお宅を訪れたとき、先生の部屋に紅白の和服を着けた神主さんがいた。それはあの時の神主だった！私が先生にこれまでのこと全てを打ち明けると、先生は物思いにふけり始めた。

少し経ってから、シモニー先生は「この方は鎌倉から来られた甘縄神明神社の神主さんです。数年前、その神社から神聖な鏡が盗まれました。そのことは秘密です。その鏡がイスラエルに有るという情報を得たので、この方がこちらに出向かれた次第です。鏡が盗まれたとき神様は怒りました。いろいろな悪霊が解放されてしまいました。おそらく、みえこさんのアパートの家主が鏡を盗んだのでしょう。今、鏡はその鍵のかけられた部屋にあると思います。神主さんに鏡が返されると、いなくなった人達も戻ってくるでしょう」

「何故彼らはいなくなったのでしょうか？」と、私は聞いた。

「神聖な鏡を見てはいけないのです。あなたも鏡をのぞいたら戻ってくることはできなくなります」とシモニー先生は答えた。

「それでは、みえこさんは誰ですか？」と私は聞いた。その問いに対してシモニー先生は、私のほうを見て微笑むだけだった。

私が先生のお宅から出るとき、シモニー先生は「炒り豆を持っていくのを忘れないように」と、言った。私はなぜ炒り豆が必要なかわからなかったが、先生にその理由を聞くのをためらってしまった。理由はともかくシモニー先生のいうことなので、私は炒り豆を準備することにした。

7.

さて、私は三回目の日本語の授業を受けるためにみえこさんの所に行った。私は鏡を包むために白くてきれいな布を持ってきた。私のポケットの中には、炒り豆の入っている袋があった。

今回みえこさんは眼鏡をかけ、飾り気のないロングスカートをはいていた。彼女は私にすぐ「あなたは日本語を知っていたのに、なぜ私の授業を受けに来たのですか？」と聞いた。

「私は警官です。いなくなった学生たちの行方を追っているのです。」と、私は答えた。

「鍵のかかっている部屋に入るのを手伝ってください。」

「それは危な過ぎます。止めてください。」

みえこさんは私の袖を掴んだ。彼女の目から涙がこぼれ始めていた。

そのとき、私は彼女に対して強いやさしさを感じていた。

「あなたは誰？」と、私は聞いた。

「私は狐です。でも、あなたに魔法をかけるはずだったのに、あなたが好きになってしまったのです。」

おかしい愛の告白である！

私は鍵のかかっている戸に近寄った。戸の向こう側から唸り声が聞こえた。戸の隙間から煙が出てきた。銃や柔道の心得など何の役にも立たないと感じた。ポケットからシモ

ニー先生の炒り豆を取り出した。戸のノブに手をかけた。鍵はかかっていなかった。私は戸を開けた・・・

8.

パブリクと一緒に、パブでビールを飲みながら今回の事件について回想した。パブリクは、

「呪術や炒り豆や狐などは本当なのか？そんなものを信じられるのか？」と聞いた。

「あなたのほうがよくわかっているはずだ」と私は答えた。

9.

みえこと結婚した日は、とても晴れていたのに雨が降っていた。空を見上げたが雲ひとつなかった。これは本当に狐の嫁入りのようだ。

愛する狐との結婚生活とはいえ、私は時々ちょっと怖くなる。私が悪い夫になれば、彼女は私を根付にってしまうだろう。

10.

私は警察の仕事を辞め、大学でシモニー先生と一緒に博士論文を書いている。

論文の主題を知りたいですか？もちろん、炒り豆についてですよ。

イスラエルのお医者さんの ための日本人の妻

1.

日本人の女性がイスラエル人と結婚したがるのには理由があるかもしれないし、イスラエル人が日本人の女性と結婚したがるのにもいくらかの理由があるかもしれない。それはともかく、私は日本人の女性と結婚することだけは決めている。まだ相手はいない。これから見つけるのだ。でも、それがとても大変なことであることがだんだんと明らかになってきた。

私がイスラエル人というだけで、連絡が途切れることすらある。でも、私はあきらめたりはしない。

2.

そのころ私は、イスラエルの中の小さい町で医者として働いていた。周りにいくつかの村があったが、この周辺には私が働いていた診療所が一つあるだけだった。

普段私は診療所で働いていたが、時々重い急患を看るために救急車で出かけることもあった。

ある日電話で救急出動要請があった。人工蘇生のための準備をしなければならなかった。サイレンを鳴らしながら救急車を飛ばした。

私は救急車が墓場の方向へ向かっているのに気がついた。この近辺には墓場はここにしかない。その頃ある村の全員で村の住人の一人を吊っていた。ユダヤ人の葬儀では死者を白い袋に入れて埋める風習がある。そのために特別な専

門職人が、小さな家で死者を葬る準備をしなければならない。

まず私はその村の誰かが突然具合が悪くなったのだと思った。しかし、私が到着したときその小さな家の中に連れて行かれた。

「人工蘇生の必要な患者はどこだ！」と私は叫んだ。

みんなが死者を指差した。

「私を馬鹿にしているのか？」と私は言った。

「死者の親戚の一人が、死体が動くのを見たんだ。」と誰かが言った。

「私は単なる医者であって、神様じゃない。」と私は言った。「しかしもし彼が活着しているなら、蘇生の努力はする。」

私は死者の胸に聴診器を当てた。死体の胸から鼓動が聞こえたので私はすごく驚いた。私は驚きと怖さで失神しそうだった。が、これは私の鼓動だと気がついた。そして、目の前に横たわっているのは間違いなく死体だった。

私たちが診療所に戻る準備を始めたとき、村人が私たちを呼び止めた。死体がまた動いたからだ。私はもう一度検屍確認をした。どう見てもそれは死体以外の何ものでもなかった。

しかし、私たちが再度帰る準備を始めたとき、親戚がもう一度死体が動くのを見た。

私は、「それは確かに死体ではあるが、動くのであればそれを埋めてはいけない。」と告げ、その小さい家に死体を残した。

翌日村長が「死体が家からいなくなった。」と、私に電話をかけてきた。

3.

その夜私は変な夢を見た。例の死人が私の前に現れ、私に話しかけてきたのだ。

「私の死骸を葬らなかったので、私はあなたの手伝いをすることにします。私はあなたが願っていることを知っています。その願いを叶えましょう」。

そういつて彼は消えた。

4.

数日後の夜中に電話がかかってきた。

「病院の人工蘇生室です。たった今私たちはある患者を蘇生しました。彼の意識が戻ったとき『この電話番号に連絡してください。今日三時に、その人の妻がイスラエルの空港に到着する』と彼は言いました。ですからあなたが奥さんを迎えに行くつもりなら、そうしていただいて結構です」。

私が時計を見ると既に夜の二時になっていた。さてどうする？これは誰かの悪い冗談だろうか？とにかく目がさえてしまったので、ちょっと眠ることはできそうにない。

そこで、空港に行ってみることにした。急ぐことにしよう。途中で空港の案内に電話をかけ、「どの飛行機が三時に到着しますか？」と私は聞いた。

「三時到着は東京からの一便だけです。」との返事だった。

私は急いで花束を買って、出口の前で彼女を待つことにした。しかし、どうやって彼女を見分けたらよいだろうか？出口からたくさんの日本人の女性が出てきている。

どの女性が私の妻なのだろう？私は『彼女が私を見つけてくれるだろう』と信じて、花束を握り締めて待ち続けた。

数十分後、その便の搭乗客は全員いってしまったようだったが私のもとへは誰も来なかった。

「これは誰かのたちの悪い悪戯だ。信じた私が馬鹿だった」と、私は思った。

用意した花束をゴミ箱に投げ捨て、ベンチに腰を落としした。

全てが終わった。気持ちが落ち込んできた。

ふと、小さくすすり泣く声が聞こえた。

私の近くで日本人の若い女性が泣いていた。

私は彼女に「どうしました？」と話しかけた。

「私の主人が私を迎えに来なかった。」と彼女は言った・・・

5.

日本人の妻がいるというのはこういうことなのだろう。いつも家の中が清潔で優美で、そして美味しい食事があり、目の前に美しい女性がいる状態なのだ。

のりこという日本人の女性が私の家に来たとき、私は何が幸せであるかが理解できた。

家で毎日やさしい花が私を待っているように感じた。

仕事が終わるとすぐに家に帰り、彼女のためにきれいな花といろいろなプレゼントを用意した。彼女は毎日美味しい食事を作って、私の帰りを迎えてくれた。私たちは理想的な夫婦であったと思う。

6.

ある日、私は運良くいつもより早く家に帰ることができた。予告なしに妻の好きなイタリアンレストランへ彼女を連れて行って、びっくりさせようと思った。

音をさせずに家に入ると、妻が誰か女の人と話しているのが聞こえた。

その女性は「のりこ、お前は何をするべきなのかわかっているよな。お前は狐であることに嫌気がさして人間になりたかったんだろう。これまでに必要なだけの人数を殺してきた。これで最後だろ」と言った。

のりこは「私には彼を殺すことは無理です。これまでこんなに強く誰かを愛したことがないから。例えどんなことになろうとも、私には彼を殺すなんてできない」と答えた。そのことを聞いたとき、私は彼女たちに私がここにいることがわかるようにと、ドアを音を発して閉めた。すぐのりこが居間から出てきて私を迎えた。私がのりこと一緒に居間に入ったとき、そこには誰もいなかった。

その夜、私は気持ちがあたふあっていたが、のりこには昼間私が聞いたにそのことについては何も話さなかった。

7.

翌日、私が働いている診療所の所長が私を呼んで「患者の一人から、あなたに往診して欲しいと要請がありました。彼女は日本の外交官なので、丁寧な態度で接してください」と言った。

私とその患者の家に着いたとき、日本人の女性がドアを開けた。私はこれまでにこのように美しい女性を見たことがなかった。

(前髪を切り揃え、艶のある真っ黒な後ろ髪は背中の中辺りまで真っ直ぐに伸びていた。黄色人種とは思えないほど色は白かったが、不健康さはなく、独特な妖しさを醸しだしていた。)

彼女は色彩あざやかなガウンを着ていた。彼女は微笑んで、「こんにちは」と言った。居間に私を招き入れ「私は健康な女性ですけど、最近胸が痛むのです」と彼女は続けた。そして彼女はガウンの襟元を開いて、胸を露にして私に笑いかけた。

私は「検査をしますので、取り敢えず服をきちんと着てください」と言った。

「あら、日本の女性には興味がないの？」と彼女は挑発するように言った。

「私には妻がいて、彼女をととても愛しているのです」。彼女の顔から笑みが消え、服を着なおして、「残念ね」と彼女は言った。[もう帰っても結構よ。あなたには他に用はないわ。]

私は職場に帰った。この件についても私はのりこに何も話さなかった。

8.

二日後、私の診察室にある年寄りの日本人の女性が入ってきた。

「あなたの奥さんは人間じゃない」と、彼女は言った。「彼女の持ち物を調べれば真実が明らかになる。彼女はあなたを殺すつもりだ。彼女をすぐに追い出したほうがいいぞ」。

「なんて人だ。まずあなたがここから出て行くように！」と言って、私は入り口を指差した。

私は何も調べるつもりはなかった。

のりこの持ち物を調べて何が見つかると言うのだ？ 私達の間の破局だけだろう。

その鬼婆が出て行った後、私は倦怠感に襲われ病人になった気がした。そして、その日家に帰ったとき、本当に病気になった。

のりこは私を看病し、ある薬の入ったコップを持ってきて、「これを飲めば、病気は治ります」と言った。

私は「もしかしたらこれは毒で、それを飲んだら死ぬかもしれないが、それならそれでいいだろう」と思い全部飲んだ。

9.

翌朝私は早くに目が覚め、自分が元気になっているのに気がついた。笑顔でのりこが「朝ごはんの準備ができています」と言った。

私達が朝ごはんを食べていたとき、私は「のりこ、私は全部知っている。昨日あなたが薬を持ってきたとき私は・
・」といいかけたとき、「私も知っています」と、のりこが私の言葉を遮った。私達は数秒の間黙って見つめ合った。

「私達の愛のために、私は全てを放棄することに決めました。でも私達はすぐここから逃げなければなりません」。

10.

それから半年後ある日鎌倉にある稲荷神社の前で、私達夫婦が祈った後にのりこは「大事な話があるの」と言った。そして顔を少し赤らめて「多分私は妊娠していると思います」と言った。

私たちはそれが何を意味するのかを理解した。お稲荷様は自分の狐をきちんと最後まで面倒を見るのだろう。

上野から蝶々

1.

蝶と花の高画質の写真を撮るためには、高級なカメラが必要だ。このカメラを買うためにみどりは一年間節約をした。彼女は店員として働いていたので、給料はそれほど高くなかった。

どうして彼女は、蝶の写真を撮るのが大好きなのであろうか？たぶん彼女は子供のときに、大好きなおばあさんと一緒に、緑色の野原で走りながら、蝶を獲った思い出が忘れられないからだろう。今でもお盆に寛永寺にあるおばあさんのお墓参りをするとき、そのときの野原の風景が脳裏に浮かぶ。

2.

みどりは若い女性だった。非常にやせていて存在感の薄い女性だった。

他の若者たちと同様に、彼女も恋をしていた。彼女には愛する男性が二人いる。しかしそれは実ることのない恋だった。

一人の男性とみどりは、インターネットで知り合って文通している。もう一人の男性は、毎朝地下鉄で見かける人物だ。

しかし、どうしてそれが実ることのない愛だといえるのだろうか？

最初の男性に、彼女は嘘をつき続けている。

ジョンさんというアメリカ人は、彼女がお金持ちであると信じ込んでいる。毎日彼女はゴルフをしたり、ヨットでセ

ーリングしたり、高級なレストランで食事をしたり、高いクラブでダンスをしたりしていると思っている。現実とはちょっと違うようである。

もう一人の方もアメリカ人かもしれない。彼は金髪で青い目をしていてとてもハンサムだ。毎朝上野駅で電車に乗るとき、彼女は彼の前に座った。彼は新橋駅で降り、みどりは渋谷まで乗る。新橋の周辺にはいろいろなオフィスがある。なぜかは分からないが、彼女は彼がお金持ちであると思った。

毎日彼は電車から降りるまで、彼女を微笑みながら見つめ続けた。もちろん、このハンサムなお金持ちが貧乏な女性と真面目に付き合うことなどないだろう。

3.

インターネットで知り合ったジョンさんも蝶が好きだった。彼はみどりを、「蝶々さん」と呼んだ。彼はみどりの蝶と花の写真が大好きだった。彼らは、まだしばらくは本人同士の写真は交換しない約束をした。知り合いになって半年、ジョンさんは少しずつみどりの暖かくて優しい友人になった。やっとみどりは、彼の本当の愛情を感じ始めた。度々彼女は、緑色の素晴らしい野原の美しくて大きな蝶と花の中に、ジョンさんと一緒にいる自分の姿を想像した。

電車でも知り合ったアメリカ人は、みどりに肉体的感情と強い熱望を呼び起こした。彼女は、筋肉質のたくましい彼の腕を見ると、既に彼に強く抱かれているように感じた。彼の青い目から彼女は逃げるができなかった・・・

この二人の男性は彼女の心を捕えていた。

4.

ある日ジョンさんから大変な知らせが届いた。

「明日東京に到着します。」と彼は書いてきた。

確かに“大変”である。ジョンさんが来れば、みどりが嘘つきだということがばれてしまう。ヨットやゴルフは一体どこに？ここにいるのは、上野に住んでいるとてもやせている貧しい普通の女性だ・・・

どうしたらいい？彼に自分の住所を知らせるべきだろうか？

嘘がばれて、相手にののしられないですむ方法、彼女の考えられる方法は一つだった

翌朝、みどりはいつものように仕事に向かった。決心した彼女は落ち着いていた。上野の駅に来ていつものようにホームに降り、ホームの端に立って電車を待った。電車が速度をゆるめながら入ってくる。

そして、みどりは覚悟を決めた・・・

と、突然誰かの強い腕がみどりを抱いた。「蝶々さん、愛しているよ！」というのが聞こえた。

はっとして後を向くと、それは金髪のアメリカ人だった！

5.

あなたが休日に代々木公園を訪れたとき、蝶と花の写真をとっている一風変わった、でも幸せそうな夫婦の姿を見かけるかもしれません。でも、彼らの邪魔をしないであげてくださいね。

日本語の叙情詩には気をつけよう (危険な詩集の発行)

1.

ある日私が目覚めたとき、「日本人であればどんな女性でもいい」と思うほどに、日本の女性に恋をしてしまった。そして私は日本語を勉強し始め、ついに日本語で叙情詩を書いてしまった。

イスラエルでその詩集をどうしたらいいだろうか？

少し考えて、私はイスラエルの外務省にある、日本の文化関係の部署にそれを持って行った。

青い目と白い歯をしている、金髪のシャイ・ケルベルトという文化部の事務官は、私の本を嫌そうな目つきで見て、「あなたの詩はイスラエルの文化を紹介していません」といった。

「では、私の詩はどこに属していますか？」と私は聞いた。

「あなたはロシアから来たのでロシアの文化に所属するか、詩自体は日本語で書かれているので日本の文化に分類されます。ロシアの大使館か日本の大使館に行ってみてください」。

ロシアの大使館では、「ロシアの文化に属していると思うなら『誇り高きロシア語』で書くべきだ」と言われ、私は追い出された。

ゆみさんという日本大使館の文化の外交官補に、「あなたの詩は素晴らしいと思いますけど、それは日本の文化に属

していません。あなたはイスラエル人だから。イスラエルの外務省の文化部のシャイさんと話して下さい」と言われた。

袋小路だ。私の詩はどここの文化にも属していないというのか？誰も私の詩集を必要としていないということなのだろうか？一体どうしたら良いというのだ？

2.

この複雑な状況について考えるために、エルサレムにある「マクス」というカフェに行った。

私のテーブルの隣人はイジャーという「マクス」の常連である退役大佐だった。

「不機嫌そうだね。何かあったのか？」と、彼は聞いた。私は一部始終を語った。

「シャイ・ケルベルト？」と、イジャーは笑った。

「彼を知っているのかい？」と、私は聞いた。

「シャイを怨まないでくれ。彼には日本の詩は全然わからないだろう、他の分野では素晴らしい専門家なんだがな。あなたの詩を私に預けてみないか？多分何か手伝ってあげることができるだろう。」

3.

イジャーは「退役大佐」などではなく、情報局のヨーロッパ支部の大佐として働いている人物であった。シャイの「文化部の事務官」というのも扮装で、本当は情報局勤務の将校だった。イジャーはシャイの上司だったのだ。

これまで彼らは、日本の詩についてなんぞ、全然考えていなかった。

情報局のパリ支局では失策が重なっていた。優秀なイスラエルの諜報員がいなくなったのである。いや、もしかすると殺されたのかもしれない。

イジャーはシャイと一緒に彼の部屋に座り、そのことについて話していた。

「私は誰か裏切り者がいて、パリ支局に潜り込んだのだと思う。パリで二人の新しい諜報員が働き始めてから、問題が起こっている。まず彼らを調べなければならぬ」と、イジャーが言った。

「どうするつもりですか？」と、シャイは聞いた。

「アイデアはある。変な『日本の詩人』を覚えているか？彼を使うのさ」と、イジャーは言った。

4.

二日後、突然シャイ・ケルベルトが私に電話をかけてきた。

彼は猫なで声で、「あなたの詩集の出版を手伝える可能性が出てきました。今すぐパリに行くことができますか？」と言った。

「パリに！？」嬉しさのあまり私は眩暈を感じた。「もちろん！しかし今私には、暇な時間はたくさんありますが、お金は全然ありません」と私は答えた。

私は六ヶ月間失業していたのだ。私の詩集の英語への翻訳が、私の貯蓄の全てを飲み込んでいた。

「お金についての心配はしないでください。あなたの詩は、イスラエル文学の評価を高く上げる可能性があります。旅費は私達のほうで用意します。パリであなたは私達の知り合いである、二人の発行人を訪問してください。彼らがあなたの詩集の出版を手伝います」と、シャイは言っ

た。「あ、それからあなたと一緒に女子職員が同行します。一時間後に私の部屋に来てください。いいえ、彼女は日本人ではありません」

5.

私がシャイの部屋に着いたとき、もうそこに「私達の女子職員」が座っていた。彼女は暖かみのない目と線のような口をしている金髪の女性だった。こんな女性にはロマンチックな話をしても何の意味もないだろう。しかも、彼女は私に何か危ないものを感じさせた。

「私はオラーです」と、彼女は言った。

詩人が部屋を出たとき、シャイはオラーを呼んで、彼女に囁いた。「彼はイジャーの手の者で、私たちにとっても危ない」。

「心配しないで、ボス。彼がパリを見ることはない」と、オラーは言った。

6.

イワン・チェーホフというロシアの情報局勤務の部長代行は、イスラエルで働くロシアの諜報員から、ある情報を受け取った。

イスラエルの諜報員が、何か重要な本をパリに運んでくるとのことだ。本の内容についての細かい情報は明らかではないが、とても重要な秘密が隠されている本であることは確かなようだ。多分その本には、秘密の暗号を解く鍵が書かれているのだろう。

チェーホフは、その本をどんな代価を払ってでも手に入れたかったので、ダーシャ・リモノワという女性の諜報員を

呼んだ。その足の長い細身の金髪の女性は、チェーホフの部下の中で一番優秀な諜報員だった。

「その本を手に入れる際に、イスラエルの諜報員を殺さないように」と、チェーホフはダーシャに言った。

「最近イスラエルの情報局員は、私たちの諜報員を何人か助けてくれている。できればそのイスラエル人を手伝ってやれ」

ダーシャが部屋を出た後、彼は万全を期すため赤ら顔の年配の男を呼び寄せ、彼に何か耳打ちをした。

7.

私が部屋に戻ったとき、彼女が私の部屋にいることにすぐには気が付かなかった。彼女は窓の近くに立っていたが、まるで何かの影のようであった。部屋の薄暗さに目が慣れてきた頃、そこにきれいな色の着物を着た細い日本人の少女がいることに気が付いた。

なぜかは分からないが、不思議と怖さも驚きもなかった。彼女は私を見て、微笑みながら会釈をした。

「こんにちは。私はひとみです」、と彼女は言った。

「こんにちは」と私は答えた。

「お祖父様が私をあなたに遣わしました。」

「お祖父様？」と私は聞いた。

「私のお祖父様は松尾芭蕉です」。

彼女の答えは私を少し当惑させた。芭蕉先生は三百年前に存在していた人物だ。本物なら本当に「お爺さん」だろう。突然私は、この少女に足がなくて空中に浮いているのに気が付いた。やっと状況が掴めた。彼女は幽霊なのだ。なら本当に彼女は芭蕉先生の孫なのかもしれない。しかしそんな馬鹿な！

ともかくにも彼女は話し続ける。「お祖父様はあなたを助けるために私を遣わしました。あなたは危険にさらされています。あなたはパリに行ってはいけません」。

その言葉は私に大変な衝撃を与えた。

「私にはその旅行を断ることはできない。その旅行は私の人生を変えるものだから」と私は言った。

彼女は答えた。「そうですね。本当に変えてしまいますよ！その旅行からあなたは帰って来られないのですから」私は彼女の強い口調に困惑した。

「でもどうしてお祖父さんは、私を助けたいと考えたのですか？」

「お祖父様はあなたの詩が好きだから。」

それを聞いて私の疑問は解消した。

8.

オラーは離陸の直前に搭乗し、詩人から離れた席に座った。オラーは彼が好きになれないので、ケルベルトの指令を喜んで遂行するつもりだ。

飛行機が安定したとき、アナウンスが聞こえた。「ベルトを外していただいても結構です。ただいまより、客室乗務員が皆様に冷たいお飲み物をお持ちいたします」

きれいな日本人のスチュワーデスが、微笑みながら会釈をしてオラーに冷たいオレンジジュースを差し出した。

オラーは「どうしてイスラエルの飛行機に日本人のスチュワーデスがいるのかしら？」と、ふと思ったが、喉が渴いていたので差し出されたジュースを一気に飲んだ。

そして彼女はうなだれた。オラーは昏睡した。

9.

どうして私はパリが好きなのかって？パリには日本人がたくさんいるからだ。ルーブル美術館の中で、日本人でないのは私とモナ・リザぐらいだったこともあるくらいだ。私がパリの空港を出るときには、いつも小雨が降る。今回も同じだった。

パリ行きのバスの席に座ったとき、すぐ私は近くの席に座っているひとみさんに気がついた。彼女は「あなたはホテルで日本の女性に会います。彼女はとても危ない人です。気をつけてください。」と言った。

「彼女はきれいですか？」と私は聞いた。

「ふざけている場合ではありません。真面目に取り合ってください。彼女はあなたを殺すつもりです」

「どうして日本人が私を殺す必要があるんだい？」と私は聞いた。しかし、ひとみさんはもういなくなっていた。

10.

ホテルの部屋に入ったとき、電話が鳴った。

「ロビーでご婦人がお客様をお待ちになられておいでです。」

私はロビーに降りたとき、肘掛け椅子に座っている日本人の女性に気がついた。彼女は本当に美人だった。ミニスカートを履き、きれいな足を組んでいた。これほどきれいな女性を、私の今迄の人生で見たことがなかった。

私は彼女の足から視線をそらすことができなかった。彼女は私に気がつくとすぐに立ちあがり、微笑んで私に近寄った。

微笑み続けながら会釈をし、「こんにちは、はじめまして。私にかよと申します。どうぞよろしくお願ひします」と彼女は言いながら、ある封筒を差し出した。

「ここに二人の発行人の住所と、彼ら宛ての手紙があります。彼らにあなたの詩を渡してください。」

「カフェにご一緒しませんか？」と私は誘ってみた。

「外に出かけるにはちょっと疲れているので、少しの間あなたの部屋で過ごさせていただくのはいかがかしら？」思ってもいない返事だった。私たちは、エレベーターのほうへ一緒に歩き始めた。

エレベーターの中で、彼女は顔を私に近づけた。「そのあなたの目を夢で見たわ」、と行って私に口づけをした。私の人生で最も幸せを感じられた時だった。

エレベーターは、私の泊まっている部屋のある階に到着した。

私は震える手で部屋の戸を開けた。

部屋は明かりが点いていた。私たちが部屋に入るとベッドにある女性がいた。ひとみさんだった！

私はすごく驚いた。かよさんは、顔を真っ赤にして部屋から出て行ってしまった。

私は怒って、「何でここにいるんだ！」と怒鳴った。「他人の幸せの邪魔をするな！」

「馬鹿なことを言わないように。彼女は刺客です。彼女の鞆の中に毒とペン型の注射器が入っていますよ。あなたを殺すつもりだったのですよ」と冷やかに言った。

「あなたはやきもちをやいているんじゃないのか」。彼女は私の言葉に気を留めず話し続けた。「明日あなたは、ロシア人の女性と会います。彼女はあなたの味方です。彼女も美人だけど、身の振る舞いには気がつけたほう

が良いと思いますよ」。と冷ややかな様子を崩さずに、ひとみは言った。

私の人生に、いきなりたくさんの美人が現れ始めた。私は「ひとみさん、あなたの所為でかよさんが出て行ってしまったのですから、少なくともあなたはここに残ってくださいね」と言った。しかし、残念ながら彼女もいなくなってしまった。

私の「少なくとも」という言葉に、彼女は怒ってしまったのだろうか。

11.

ヨーロッパスタイルの朝食は、コーヒーとクロワッサンだけだ。

私がホテルのレストランで、コーヒーを飲みながらクロワッサンにバターとジャムをぬっていたとき、背が高く細い金髪の女性が、私のテーブルに近寄ってきた。彼女はミニスカートをはき、きれいな足のほとんどを露わにしていた。「こんにちは。私はロシアから来たダーシャです。あなたのテーブルに座ってもいいですか？」と彼女は聞いた。

こんな女性の同伴を断るほど、私は馬鹿ではない。「どうぞ、お座りください」と、私は言った。

彼女は私に、愛想よく微笑んで話した。

「たった今モスクワから来ました。濃くて美味しいコーヒーが飲みたいですね。パリのコーヒーはとても不味いわ。まあ仕方がないことだけど…」と、ダーシャはそれでも何か愉しそうに言った。「あなたはパリで何をしていますか？」

「日本語で私の詩集を出版するために来ました。」と、私は答えた。

「その本を見せていただけますか？」と、ダーシャは言った。「私は日本の詩が大好きです！今は一人旅ですけど、全然パリを知らないんです。あなたと一緒に行ってもいいですか？」

「もちろんです。これから私は、二人の発行者を訪問するところですけど」美人の同行とは幸先がいい。本の出版はきつとうまくいくだろう。私はそう思った。

12.

第一番目の発行人は、サン・ミッシェル通りに住んでいた。私たちは古いが掃除の行き届いているビルに入り、エレベーターで三階に上がった。

いやな顔つきをしている背の低い黒髪の男性が戸を開けた。彼は脇によけて、私たちを玄関に入れた。

「はじめまして」と、私は丁寧に行った。「私はエルサレムのシャイ・ケルベルトから紹介されて来ました。私の詩集を日本語で出版するのを、手伝っていただけませんか？」

彼は私達に怒鳴った。「私を間抜けだとも思っているのか！おまえとおまえのくだらない詩なんぞ嫌いだ。なんでおまえが来たのかよくわかっている。おまえとそこのロシア人売春婦に思い知らせてやる！」そしてポケットに手を入れた。

すぐにダーシャが彼を蹴り倒した。きれいな足のわりに、蹴りはかなり強烈なようだ。

「なんてことをするんだ？」と、私は驚いて聞いた。

「彼は日本の詩が嫌いみたいだったけど？」ダーシャは微笑みながら倒れている発行者に近づき、しゃがんで彼のポケットからピストルを取り出した。「糞野郎めが、五体ばらばらに切り刻まれたくなかったらロシア人に絡むな。」と彼女は言った。彼は答えなかった。

こんな言葉を使う女性がなんで日本の詩を必要とするのか、と私はいぶかった。ともかく私たちは外に出た。ダーシャは「彼はあなたの詩を出版するつもりは無かったみたいですけど」と、言った。

「そんなことは問題ではない。ともかく私は別の発行者のところに行きます。今度こそは成功させましょう」と私は言った。

「今の訪問は成功だったわ」と、ダーシャは嬉しそうに言った。

13.

私達は、次の目的地であるモンマルトルの発行者のところへ向かうことにした。ダーシャの携帯電話が鳴った。彼女は手短かに答えて電話を切った。

「あそこでたくさんのお客さんが私達を待っているようです。ワーシャおじさんのお手伝いが必要みたいですね」と、ダーシャが私に言った。

目的の建物の入り口についたとき、体格の良い赤ら顔の年配の男性が、コートに何か大きな「物」を包んで私達を待っていた。彼からはたまねぎと酒のにおいがした。ダーシャは彼に抱きついて「ワーシャおじさん！」と言い、彼に口づけをした。

私達は、彼と一緒に建物の二階に昇った。

戸を開けたのはオラーだった。部屋には数人の怪しい人達と供に、シャイ・ケルベルトとかよさんがいた。

「あなたの旅行はここで終わりです。今あなたの詩を出版しましょう」と、シャイは薄笑いを浮かべながらピストルを取り出した。

「明日の朝刊で、イスラエルから来た日本語の詩人の『し』がパリ中で知れ渡ることになるのよ。広告ではなく、ニュースとしてね」かよさんが付け加えた。

ワーシャおじさんは「カラシニコフは別の思い」と言った。

「カラシニコフって誰だ？」とシャイは聞いた。

「ほら！ここにいるぞ」、とワーシャおじさんはコートに包まれていたものを持ち上げた。

一瞬のことだった。そして部屋から生きて出てきたのは三人だけだった。これ以上詳しく書くのは蛇足だろう。

私はダーシャとの別れ際に、私の詩集にサインをして彼女に手渡した。

14.

私は「マクス」に一人座っていた。そして悲しい思い出に浸っていた。

ひとみさんは義務を果たして、いなくなった。お祖父さんのところに帰ったのかもしれない。

私はひとりで寂しくコーヒーを飲まなければならない。突然カフェのガラス戸が開いて、ひとみさんが入ってきた。黄色いミニスカートをはいている彼女には足があった。輝いた表情でひとみさんは、「お祖父様は私を解放してくれました！」と言った。彼女はスカートを撫でて自分

の足を見た。「女性であってこんなうれしいことはない！」

少し照れて顔が赤らんでいた。「私の足はかよさんの足よりもきれいでしょう？」と彼女は言った。私は答えの代わりに、彼女に優しくキスした。

「お祖父様のお墓に一緒にお参りに行きませんか？」と、ひとみさんは聞いた。

「行きましょう！」と私はうなずき、彼女にもう一度キスをした。

15.

二日後、突然イジャーが私に電話をかけてきた。

「あなたの詩集の出版を手伝える可能性が出てきました。今すぐあなたはモスクワに行くことができますか？」とイジャーは言った。

「すみません。残念ながら、今私は大津に行くつもりです」と私は答えた。

「大津？それはどこですか？」とイジャーは聞いた。

「日本の本州にあります。琵琶湖の近くです」。

「何のためにそこに行くんですか？」

「ある方のお墓参りをするつもりです」と私は言った。イジャーには何のことかわからなかった。

16.

松尾芭蕉の墓にイスラエル人の書いた一冊の奇妙な詩集が供えられていた。時折風が吹いては、その詩集のページがめくられる。あたかも誰かがその詩集を楽しんでいるかのように・・・

部屋の床に何かある

私の新しい隣人は、背が高く若く痩せた金髪の女と、背が低く黒髪の太った年配の男だ。変な夫婦である。

ある日の朝、誰かが私のドアを強く叩いた。私が急いでドアを開けると、隣の女の人がいた。

彼女は驚いた顔をしていた。その綺麗な目からは涙が溢れていた。

「助けてください！」と彼女は言った。「私の彼氏は私を殺そうとしている！」

私は、「それなら警察を呼んだほうが」と言った。

「彼らは私を信じていない！警官は私を笑っただけ！」と彼女は続けた。

「早く来てください！」

私達は彼女のアパートへ走った。アパートに着いたとき、私は彼女の彼氏を見た。彼は床の上の血溜まりの中に横たわっていた。彼は死んでいた。

私は「あーなんて事だ。彼は死んでいる！！」と叫んだ。突然私は、彼女が私に向けているピストルを見た。「もしあなたが私に協力してくれれば、あなたと結婚して、二人でアメリカに逃げられる・・・」

すぐに私は起きた。これは私の単なる夢なのだろうか？でも突然、私のドアを誰かが強くノックした。私はさっと肩に何かを羽織って、ドアを開けた。

そこに、隣の女の人立っていた！

彼女は驚いた顔をしていた。その綺麗な目からは涙が溢れていた。

「助けてください！私の部屋の床の上に・・・早く来て下さい！」

私たちは彼女のアパートへ急いだ。

彼女の部屋の床の上に真っ黒い大きなゴキブリがいた・・・

学生の冗談

おかしな短編

とある国のとあるビジネスマンは、ビジネスのために日本に行く予定だった。日本旅行の前、彼は日本人の留学生に日本語の授業をしてもらった。

そのビジネスマンは、ちょっと教養が足りない人だった。学生が一生懸命教えたのに、ビジネスマンは軽蔑的に彼と話した。しかも、ビジネスマンは約束の授業料を払わなかった。でも学生はいつも落ち着いていて、いつも控えめに授業を行った。ビジネスマンは、毎回の授業をノートにちゃんと書いた。

出発の前に、ビジネスマンは飛行機の席に座って、授業を思い出すためにノートを開けた。その授業の内容は「銀行員との会話」だった。「銀行に来たとき、銀行員に近寄って高い声で話すー（強盗だ！）みんな、床に伏せろ！手を頭の後ろにやれ！」と書いてあった。

誰にも話さないでおきましょう

1.

もしあなたが九ヶ月前に日本から戻っていたとして、今日東京から「ご出産おめでとうございます！」の知らせが届いたとしても、驚かないでください。そして私は驚かなかった。

私は九ヶ月前まで、東京にいたときは浅草で部屋を借りていた。私のほかにあのアパートにはいろいろな外国人が住んでいた。私の隣人達は、フランス人の三十歳男性のほかは、いろいろな年齢の女性だけだった。フィリピン人やオーストラリア人、そしてアメリカ人の女性などだった。私の部屋は一番狭くて暗かった。部屋に窓がなかったので、夜の暗闇に誰か女性が私の毛布の中に入ってきて、それが誰かはわからない。朝食中、台所で女性達がいろいろな冗談を話したりたくさん笑ったりしていたとき、私だけ面食らって微笑んでいた。こんな女性の中から一体誰が、昨夜私の部屋に入って来たのだろうか？

そんなアパートだった。

アパートの女主人と私はすぐよい友達になった。彼女はちえこさんといった。茶の湯の先生だった。毎日東京で散歩したり、日本のレストランで日本料理を食べたり、カフェーでコーヒーを飲んだりした。毎晩茶の湯を見に行った。

2.

いろいろな女性がいろいろな理由で茶の湯を習っている。結婚前の若い女性と八十歳のお婆さんが一緒に茶の湯の芸術を習っている。

私は自分が茶の湯を習うべきだと思わなかった。

外国人が執り行う日本の式典はおかしくて自然じゃないと思う。日本の式典は日本人でだけで執り行うべきだ。大抵、ちえこさんの生徒の茶の湯の動きはスポーツみたいで、ぜんぜん心の影響が感じられない。

ある晩私は、茶の湯を習っている生徒で特別な女性に気がついた。多分彼女はきれいではなく若くもない女性だけれど、彼女が茶の湯にとっても深く集中している動きを見たとき、私は感動した。本当に印象的な女の人だった。

「彼女は誰？」ちえこさんに聞いた。

「私の友人で、くみこさんといいます。」との答えを得た。

ちえこさんは私の感心した視線に気がついたのか、その晩それ以上私とは話さなかった。その夜私はひとりで寝た。

3.

二日後、ちえこさんが「くみこさんがご主人と一緒に私たちを家に招待してくれました。」といった。

「彼らは浅草に住んでいます。ずっと近いです。とても幸せな夫婦ですけど、まだ子供がいません。ご主人に問題があるのかもしれない。」

翌日の晩、私達はきれいな花と高価なお菓子を買ってくみこさんの家に行った。

くみこさんのご主人は気持ちのいい人だった。彼らの出してくれたご馳走は本当に素晴らしかった。お酒を飲んでゆっくり会話をしてとても楽しんだ。たくさん笑った。突然ご主人とちえこさんは「少し出かけてきます。」といった。微笑を残しつつ「行ってきます」と言い部屋から出て行った。

彼らの後ろで戸が閉まったとき、くみこさんは私に近寄り私の手を掴んで、どこかへ私を連れて行った。

寝室に来たとき、彼女は突然私に寄り添った。彼女の全身が震えていた。そんな彼女に応える他に、私にはなすべがなかった。

最後の数分の後、すぐに彼女は私を強く突飛ばした。彼女は私を出口へ押して「出て行って！」と叫んだ。

私がアパートに帰ったとき、ちえこさんは「鍵を返して！」といった。その晩私はホテルに移った。

私は数回くみこさんの家の近くを通ったけれど、恥ずかしくて彼女に会うことはできなかった。

ちえこさんは私の電話を切って、メールにも答えなかった。まったく連絡を断った。私はくみこさんの電話番号とメールアドレスを知らなかった・・・

4.

私は上野駅と浅草駅のいだにある、外国人のための安いホテルを見つけた。小さな和室があてがわれた。

私は和室があてがわれてうれしかった。日本のスタイルは私にとって大切だ。日本にいと毎日が祝祭日のようだ。部屋に入ってまず日本茶をいれ、テレビをつけた。大体の日本人はテレビの番組がつまらないと思っているようだけれど、私は日本語を聞くことができるのでどんな番組でも

好きだった。女性歌手が歌っているのが特にお気に入りだった。

お茶を飲みながらテレビを見て、くみこさんのことを思い出していた。私達のセックスは感情のない早い行為だった。そのことは私を自分が動物になったような気持ちにさせた。人妻とのセックス、私はそんな状態で動物みたいに興奮していた。本能だけだった。くみこさんは単に都合のよい牡を見つけて利用しただけなのだろう。愛情なく受胎した赤ちゃんはどうなるのだろうか。

彼女はぜんぜん興奮していなかった。まったく機械的だった。重要な目的のためにこれら全ての事を行ったのだ。セックスの後で彼女が私を押しつけたとき、彼女の目に私に対する嫌悪感のようなものを私は見て取った。日本人の女性は必要とあればどんなことでもすることができる。いやなことや大変なことであっても行動にうつせるのだ。

それでも、お茶会の際の彼女の動きや、彼女の家での立ち居振る舞い、さらにベッドの中での行為において、私は彼女が特別な人物であると感じていた。彼女には私を魅了する何かがあった。

5.

そのことに思いをめぐらせていたとき、ほとんど聞こえないくらいの小さな音で誰かが部屋の戸をノックした。

私は戸を開けて驚いた。そこにはくみこさんが立っていた。彼女はうなだれていた。

「お入りください。」と私はいった。

言葉を交わさずに寄り添った。私は彼女をいとおしく感じた。こんどは気持ちの入った情事だった。

彼女はとても熱情的で濃密なセックスを求めてきた。私が外人だから彼女は恥ずかしくないのだろうか、私は思った。

朝日が部屋の中に差し込んだときには、私は一人であった。彼女がいつ部屋から抜け出たのか私は気がつかなかった・・・

6.

そのこと以来、日本を出発するまでの間くみこさんのことについてずっと思い続けていたが、彼女と会うことはなかった。

帰国後、イスラエルでの生活は私を奔走させた。仕事のことや友達や女性やいろいろな用事などが私の日本における愛の冒険を忘れさせた。それでも時々さびしさの針が心に刺さって、突然あの愛する日本人を思い出させていた・・・

そして今、九ヶ月のあとで「ご出産おめでとうございます！」というメールを受け取ったとき、私の全世界が引っくり返った。

私に赤ちゃんが生まれた！この知らせに比べると私の今の生活が全くつまらないものに見えてきた。

でも誰がこのメールを送ってくれたのだろうか？

私はすぐにちえこさんに電話をかけることにした。

私のメールアドレスを知っているのは彼女だけだからだ。

「ご出産おめでとうございます。」と彼女は言った。

「かわいい娘さんですね。母子ともに健康なようです。」

「くみこさんのご主人は喜んでいますか？」と私は聞いた。

「くみこさんは妊娠しているとき、彼の元を離れて実家に戻りました。今彼女は埼玉の片田舎にいます。」

「どうして！？彼らは子供が欲しいということで、私のことについては同意していたのでは？」と私は驚いて聞いた。

「彼女は妊娠したとき、あなたのことを強く愛しているのを感じたからなの。それで、もう他の男性とは一緒に住んでいられなくなったの。彼女は自分の気持ちを制することができなかったの。」

「どうして彼女は私に連絡をしなかった？」私は気持ちがたかぶってきていた。

「日本人の女性はそのような状態で連絡することはしないんです。日本の女性は一人でごんばってしまうんです。」

7.

ともあれ私には日本に娘がいるわけだ。さて、どうしよう？ なんにしても何かをしなければならない。普段から私は物事の決断は早いほうだ。私はくみこと私の娘を私のもとに引き取ることに決めた。それでまず最初に上司のもとに行き、私は言った。

「私には子供が生まれたので給料を上げてくれ。」

「君は独身だっただろう。子供がいるのか？」と上司は笑って答えた。

「実は私は密かに日本で結婚していて、それで子供が生まれたんです。」

上司は笑うのを止め、すごくびっくりして言った。「日本人の奥さん？日本人の子供？それなら君はたくさんお金が必要だな！」

そして彼は私の給料を上げてくれた。

それから私は娘のためにいろいろなものを買ひ、アパートを彼女達と一緒に住めるように片付けた。

日本へのフライトの間中、私は何かやり残してはいないかと思案していた。

8.

駅からくみこの家の近くまで通っているバスがないので、私はタクシーを使った。

彼女の実家は小さくてきれいな家だった。玄関に近寄ったとき子供の泣き声が聞こえた。私の心は高鳴った。娘の声だ！

呼び鈴を押すと、年配の女性が玄関の扉を開けた。

その年配の女性は私を見て立ちすくんだ。

奥から「誰？」というくみこの声が聞こえた。

お母さんが黙っていたのでくみこが玄関に出てきた。

しばらくの間私たちは黙っていた。

「私の娘の名前は？」と私は聞いた。

「ひとみ」とくみこは答えて泣き始めた。

9.

今、私達は一緒にエルサレムの私のアパートに住んでいる。エルサレムでくみこは茶道を教えることになった。私はくみこの芸術に敬意を払うためにときどき娘と一緒に彼女の道場を訪れることにしている。

私は愛する妻とかわいい娘がいてとても幸せだ。

私たちの出会いは不実なものであったかもしれないが、誰もそのことは知らない。

そしてそのことを誰にも話さないでおくだろう。

普通の家族のありふれた物語

1. 誰にも私のかわいい子を恨ませはしない

じゅんこと一郎は電車で知り合いになった。

ある朝じゅんこが一晩中続いたパーティから帰るとき、仕事に向かう一郎に出会ったのだった。じゅんこはパーティ用のドレスを着ていて少し酔っていた。一郎はスーツで身なりをきちんと固めていた。じゅんこは彼の男らしくて落ち着いた顔に惹き付けられた。じゅんこは酔った勢いで一郎に近寄り「今晚どこかに遊びに行かない？」と言った。一郎は彼女を『細くてきれいな女性だな』とは思いつつも、「私たちは住んでいる世界が違うと思うけど」と答え「あなたの住んでいる世界の中から男性見つけるほうがいいと思わないのかい？」と続けた。

「あなたはちがう世界の女性が怖いの？」

そのようにして二人は出会った。

そして二人は結ばれた。

一郎は柔道の有段者でもあり、とても勇敢な男性であるが、なぜかじゅんこの母性本能をかきたてた。

じゅんこは夫の仕事のことに立ち入らない良い妻ではあるが、ここ最近夫が毎晩憂鬱になっているのを見て、彼女は何かをしたいと考えた。

じゅんこは夫の職場がどこにあるのかを知っていた。池袋の駅に着いて彼女は夫の働いている高くてきれいな高層ビルを見上げた。彼女は何も恐れずに建物の中に入っていた。エレベータはあっというまに26階に到着した。

一郎の会社に入り込み、社長のいる部屋にまっすぐに向かった。

社長秘書の女性が「面会の予約をしてください。少々お待ちください・・・」と言ってノートを開き始めた。しかしじゅんこはそれを無視して、社長の部屋の方へ突き進んで行った。

秘書はあわてて「勝手に入らないでください！」と言って彼女を制止しようとしたが、じゅんこは既に部屋の中に入り込んでしまった。

その時、社長の部屋ではいろいろな会社からの重役達が集まって会議が行なわれていた。

そこに、突如じゅんこが現われ、部屋は静まりかえった。

「どなたが田中社長さん？」とじゅんこは強い口調で言った。

みんなが大柄でちょっと太った男性のほうを見た。

じゅんこはその男性に向かって「私は武田一郎の妻です」と言った。「ここ最近主人は仕事からとても気落ちして帰ってきている。私はそんな状況に我慢ができない。あなたが彼を苦しめている環境を改善させなさい」。

そう言い放つと彼女は社長室から出ていた。

数日後一郎は寝室で「今日私の昇進が決まった」と言った。

じゅんこは何もを答えず寝返りを打った。

一郎は「じゅんこももう少し僕の仕事の事について興味を持ってくれてもいいのになあ」と思った。

2. へそくりの正しい使い方

毎年正月に、一郎の親族は鎌倉にある一郎の実家に集まる。一郎は長男であるけど、事務員として働いていて兄弟の中では一番貧しい生活をしている。正月の集まりに一郎の兄弟は高級車で乗りつけてくるが一郎たちは電車と徒歩だった。

じゅんこは一郎がそのことを気にやんでいることに気がついた。

じゅんこが一郎の会社を訪ねてからおよそ一ヶ月経った。ある昼下がり誰かから電話がかかってきた。

男性の声は「こんにちは、じゅんこさん」と言った。「私は“青空コーポレーション”の山口といいます。あなたを田中さんの社長室での会議のときにお見かけしました。あなたのことが強く印象に残っています。あなたを雇えないかと考えています」

じゅんこは「私は主婦ですのでしなければならぬ家事がたくさんあります。外で働く時間はほとんどありません」山口は「私はあなたには交渉するときだけ同行していただければ結構ですので、長時間拘束するようなつもりはありません。もしよろしければ詳しく説明いたしますので一時間後に私の許へいらしてください」

一時間後、山口の事務所でじゅんこは不快な感じを与える表情の男性を見た。

山口は「彼は小林といって交渉班長です。彼の部屋に行ってどのように仕事をするか彼と相談してください」

小林の部屋に入るときじゅんこは彼の目つきにいやらしいものを感じた。

小林は「あなたは私達が一緒に仕事をするために先ず最初に何をしたら良いのかわかっていますか？」と聞いた。

「もちろん」とじゅんこは答えた。

「ではそれをすることはできますか？」

「喜んでやりますよ」

小林は卑猥な笑みを浮かべて「では時間をもったいないのですぐ始めましょう、こちらへ来てください」と言った。

じゅんこは彼に近寄って強い平手打ちを与えた。

「気持ち良かった？」と彼女は聞いた。「では仕事について話を始めましょ」

年の瀬も深まったある晩、一郎は家に帰りじゅんこに「ただいま」と言った。「じゅんこ、家の前で車が家の入り口を塞いでいる。誰か近所で新しく車を買った人でもいるのか？」

じゅんこは「一郎さん、それは私からのお年玉の替わりです」

一郎は「こんな高級車を君が買ったのか？」

どこにそんなお金が？」

じゅんこは「へそくりよ。私は儉約が上手なの・・・」と答えた。

3. 月の光の下で

ある日じゅんこと一郎はテレビの前に座って、初めての日本人の女性宇宙飛行士を見た。日本中がその女性宇宙飛行士を誇りに思っていた。テレビで丘崎花子という飛行士のことを報道していた。

「じゅんこ、宇宙飛行士になるのって怖いと思う？」と一郎が尋ねると、

じゅんこは「怖いと思うわ」と答えた。

翌日の満月の晩に、一郎は仕事が終わってからパブに行った。ビールを飲みながら仕事のストレスを解消するためだ。彼はそのパブの常連である。

一郎はビールを飲みながら、じゅんこについて思いを巡らせていた。出会ってから今までじゅんこについて解らないことがたくさんある。例えば、一郎はじゅんこの両親について全く知らない。じゅんこの両親は一郎とじゅんこの結婚のとき、じゅんこにかなりの額のお祝い金を渡した。しかし式には姿を現さなかった。一郎は未だにじゅんこの両親の写真すら見たことがない。

一郎はじゅんこの過去についても何も知らない。

じゅんこの友達についても何も知らない。

しかしじゅんこは妻として申し分なかったのだから、知らないことがたくさんあっても、一郎は気にしないことにしていた。

ビールを飲みながらこんなことを思っていると、パブのテレビで宇宙についてのニュースをやっているのに気がついた。そこでは丘崎飛行士が着物姿で扇子を開き笑顔で無重力遊泳をしていた。

突然画像が切り替わり「番組の途中申し訳ございませんが、問題が生じたようです。問題が解決し次第もとの番組に戻ります」とキャスターが言った。

近くに座っていた老人が一郎のほうを向いて「満月の夜には問題が起こりがちだが、君は自分の奥さんを守らなくてもいいのかな」と言ってニヤッと笑った。

「どういうことですか？」と一郎は訝しがった。

「竹取物語はご存知でしょう。その話でかぐや姫は満月の晩にいなくなりましたよね。私だったら今すぐにでも家

に帰りますけどね」と言っただけでその老人は再びニヤッと笑った。

いやな予感がして一郎は帰途を急ぐことにした。

家に着いて彼は「ただいま」と言ったが返事はなかった。アパートの中は明かりも点いておらず、人の気配もなかった。

結婚して以来、このようなことは一度もなかったのに、一郎は途方に暮れていた。じゅんこは浮気などしない。だからじゅんこの身の上になにかが起きたのではないかと心配になった。本当に月にでも帰ってしまったのだろうか？

警察ではまじめに取合ってくれなかった。「そんなに心配しなくても、もう少ししたら奥さんは戻ってくると思いますけどね。似たような件は沢山ありますから。」

一郎はどうすべきか考えた。

パブの老人は、どうしてじゅんこのことを知っていたのだろうか？ そうだ、まずあの老人を見つけよう。

翌日の晩、再び一郎はパブを訪れた。しかし老人はいなかった。

数日たってもじゅんこは帰ってこなかった。一郎は途方に暮れていた。毎晩月を見ながら、じゅんこをなつかしく思っていた。じゅんこなくしてどうやって生きていけばよいのかわからなかった。

毎晩一郎はあのパブに座るようになった。

ビールを飲みながらテレビを見て、じゅんこのことを思っていた。

一郎は宇宙についての番組を見るのが好きだった。

日本初の女性宇宙飛行士、丘崎花子は、宇宙船の技術の問題のため、地球に戻ることになった。

じゅんこがいなくなってから一ヶ月が過ぎた。

ある日、女性が一郎に電話をかけてきた。

「もしもし、山口一郎さんですか？私は丘崎花子と申します。」

一郎は自分の耳を信じるができなかった。

「あの宇宙飛行士の丘崎さんですか？」

「はい、そうです。突然ですが、あなたにお会いしたいのですけれど・・・」

「どうしてですか？」

「あなたに重要なこととお話したいのです。」

一時間後、新宿のコーヒーショップで、一郎は丘崎花子と座っていた。一郎はその重要なこと、というものを早く知りたかった。しかし丘崎花子は無言でコーヒーを飲んでいった。彼女はそれについて話しぶらいののだろうか。しばらくたってやっと彼女は口を開いた。

「テレビでは、私たちの宇宙での出来事について、本当のことを伝えていません。実は、途中で宇宙飛行船の燃料装置が故障して、大量の酸素が失われました。そして私たちはみんな、地球に戻るまでの酸素が十分ではないことを知ったのです。私たちは死ななければなりません。私が家族への最後の手紙を書いていると、だんだん息が苦しくなってきました。

これで終わりだ、と思ってまわりを見ると、泣いている人もいたし、叫んでいる人もいたし、横になっているだけの人もいました。みんなそれぞれのしかたで、最後の時間を過ごしていたのです。すると突然、目の前に明るい光が現われました。そしてその光の中から女の人が一人、出てきたのです。「あなたは死にません」とその人が言うと、呼

吸ができるようになりました。「あなたは誰ですか？」と尋ねると、「私は月の光の中から来ました。ご存知でしょうか？」と、答えました。その女の人はかぐや姫だったのです！」

その話を聞いて、一郎は驚かなかった。丘崎花子が宇宙で会ったのが誰か、もう一郎にはわかっていた。

「その女の人から私に、何か言伝てはありませんか？」と一郎は丘崎花子に尋ねた。

丘崎は涙を隠そうとはせず、話し始めた。

「彼女はこう言っていました。『私は宇宙飛行士たちを助けたので、あなたと別れなければなりません。あなたのもとに戻ることはできません、すみません』と。」

一郎は胸が重くなった。愛するじゅんこなしでは、彼の生活に意味がないからだ。

「あっ、そうそう。」丘崎さんは少し頬を赤くして微笑んだ。「かぐや姫は去る前に、ちょっと変なことを言っていました。『狸によろしくと伝えて』と私に頼みました。私はなんのことかよくわからなかったのですが・・・」

本当に、変な言葉だ。一郎にもそれがなんのことか、わからなかった。

丘崎さんと会った後で一郎は、酒でも飲んで酔っ払らわなければならないと感じた。新しく始まるじゅんこのいないつらい生活に、慣れなければならないからだ。

パブで先日の老人は、ニヤッと笑ってもう一度一郎に尋ねた。

「誰か私に何か伝えなかった？」と彼は聞いた。

すぐに一郎は、「狸によろしく、と伝えて」とかぐや姫が言ったことを、思い出した。

そうだ！この老人こそが狸だ！

老人はまだニヤニヤ笑っている。

一郎は言った。「私はじゅんこなしに生きることができない。どうしたら再びじゅんこと一緒にになれるのか、教えてください。」

「じゅんこと一緒にいたいのなら、おまえさんは地球を出なければならぬぞ。そして二度と地球に戻ってこれないんだ。これができるか？」

「じゅんこと一緒にいられるためなら、何でもする」とためらわずに一郎は言った。

「次の満月までに用意をしておけ。」と老人は言った。

翌日、一郎が仕事から家に戻ると、じゅんこは既に美味しい夕食を作って待っていた。

今では有名となった丘崎さんも、時々彼らを訪れる。

満月の晩になるとかならず、じゅんこと一郎は眠りもせず一晩中、月を見ている。

そのほかの点では、彼らのごく普通の家族だった。

あなたの日本の奥さんをじっと見てください。

もしかしたら彼女は、かぐや姫、ではありませんか？

いずれにしても満月の晩には彼女を一人にさせないほうがいいでしょう。

狂想的な任務

私は小説家だ。エルサレムに住んでいる。私の日常生活は二つの小説の間にある。今一つが書き終わったところだ。

次の小説はもうすぐ書き始めることになる。

これまで書いていた小説の主人公がやっと息をついたところなので、これから書き始める次の小説の主人公が息を始めるまでに、私自身もゆっくりと息がしたい。

私にも少し息抜きが必要だ。

小説は私に波のように押し寄せてくる。前の小説の波が私を飲み込んだばかりなのに、既に次の小説の波がすぐ近くにまで押し寄せてきている。

さて、あなたが見る周りの全ては私の小説の中での出来事だ。

例えば、あなたが通りを歩いているきれいな女性を見つけても、彼女に対して何もすることができない。彼女は私の小説の中の存在だからだ。「すみません、あなたはどの小説から来ましたか」とでも言って、声をかけてみますか？もし誰かが銀行に強盗に入ってきたとしても、怖がる必要はない。彼らは私の小説の中の存在であり、すぐにでも主人公が現われて彼らを懲らしめてくれる。

もし私が戦争のことについて書けば、私は弾丸を避けることもできるけれど、怪我をして、白いページを血で染めるだろう。

もし私が愛のことについて書けば・・・

私の書きかけの小説の主人公たちは苦しみ続けている。例えば、ある若い女性は服を脱いで冷たい水でシャワーを浴び始めたのだが、私が小説を脇において書き続けられないので、可哀想にも彼女はそれ以来ずっと冷たいシャワー

を浴び続けている。もし私が先を書かないでいれば、彼女は鳥肌を立てながらも永遠に冷たいシャワーを浴び続けることになる。

二人の殺し屋は標的を入り口内で待ち構えている。私はこの小説を書き終わらせないことにした。標的の人物は老衰で死んだかもしれないが、殺し屋たちは今でも標的を待ち続けている。

あるカップルは始めてキスをした。しかし、その小説も書きかけのままなので、彼らの間柄はそれ以上進展していない。

もし私の書きかけの小説の主人公たちが皆集まってきたら、私は彼らにとんでもない目に合わされるだろう。私の新しい小説で、若くてきれいな女性が、私の上の部屋に住んでいる。

下の私の部屋で、毎晩彼女のハイヒールの足音が聞こえる。

彼女はどこへ？彼女はいつ部屋に帰ってくる？彼女には沢山の謎がある。しかし、私はそれらについてぜんぜん知らない。私はつい彼女のハイヒールの上に伸びている足のことについて考えてしまう。

そして、これが重要なのだが、ある晩彼女は私の部屋のドアの前で立ち止まることになる。そんなことは現実にはありえないことだろうか？

それがなければ小説は始まらないじゃないか。

まあ実のところ私の部屋に聞こえてくる足音はハイヒールを履いた神秘的な若い女性のものなどではなく、太った年寄りの女性のドタドタいう足音だったりする。彼女は私の知り合いであり、時々彼女の荷物を部屋まで運んであげたりしている。

ある日彼女が私の部屋のドアをノックした。私が「どうぞ、お入りください」と言うと、彼女は喘ぎ声と共に入ってきてそこにあった椅子に座り込んだ。

呼吸が静まると彼女は「お忙しそうなところ申し訳ないけれど、すこしお邪魔いたします。」と言いながらも話し続けた。「いつも親切にしてくれてありがとう。あなたを信頼できる人と見込んでのお願いがあります。近所の方が、あなたが何度も日本に出かけており、日本について詳しいと言っていました。実は数年前から、私の息子が日本で消息を絶っています。そこで必要な費用は私が出しますので、日本に行って彼の消息を尋ねて欲しいのです。もしお忙しければ、すぐにでも日本に飛んでいただけたらと思うのですが。」

私は興奮して「今ちょうど本を書き終わって一息つくところです。喜んでお引き受けします。」と言った。

私の返事を聞いて、彼女はハンドバッグから、札束と息子の写真を取り出し私に手渡した。「息子の名前はダビッド・グロスといいます。この住所が彼の最後の居場所です。」と彼女は言って一枚の絵葉書を机の上に置いた。彼女が部屋を出て行ったとき、いろいろな思いが私の頭の中をよぎった。

私は日本に行く機会がいずれ訪れるであろうと信じていたので、彼女の依頼を聞いたときにほとんど驚かなかった。それに、いずれにしても日本には行く気であった。日本にはあのみちこがいるのだから・・・

私の人生で出会った女性たちは幻のようで、彼女たちから現実感を得ることはなかった。

たとえそんな女性が現われたとしても、私は嬉しくないだろうし、そんな彼女がいなくなったとしても、それほどが

っかりしないだろう。彼女たちの私の人生への関わりは、走馬灯のような、あるいは映画の中で情景が変わっていくような一過的なものようだった。

みちこはそれとは違い、私にとって現実を感じさせる女性だった。彼女はずっと私と一緒にいた。時々私のベッドの中にもいたけど、彼女は私の心の中に住みついていた。いまでも彼女の暖かい息と優しい肌を感じるができる。

私達の逢瀬は、いつも彼女次第であった。

なぜか彼女は私の居場所を知っていて、彼女がその気になったときに私に連絡をしてきた。

私がそんなことについて考えていたとき、タバコの煙りのにおいを感じた。誰かが私の背後で咳をした。振り向くと、そこに口ひげを蓄えた年配の太った男がパイプを片手に私の肘掛け椅子に座り、私を見てニヤニヤしていた。私は息を飲んだ。

するとその男は「俺なしで誰かを探せると思うかい？人探しなら俺の仕事だ。」と言った。

私は「お前は誰だ？」と叫んだ。

「俺のことを覚えていないのか？なら自己紹介しよう。俺は“黒い夜の殺人事件”を解決したジョン・スミスと言う探偵だ。」

そんなバカな！？私の前に私の小説の登場人物が座っているなんて。

すると電話が鳴った。

電話を取ると「もしもし、セルゲイですが。あなたは日本に行くつもりだと聞きました。

私のナターシャという娘を見つけてください。彼女は、新宿の紀伊国屋書店のロシア語の本のセクションで働いてい

るはずですよ。お父さんが彼女を待っていると伝えてください。」

私は耳を疑った。セルゲイとナターシャは、私の“日本からの帰り”と言う話の主人公なのだ！その小説でセルゲイは娘を探しているけど見つけることができないでいた。

私が受話器を置くなり電話が再び鳴った。

粗野な声が「俺から逃げられると思うなよ。日本に行ったとしても俺はお前を逃がさない。」

私は「お前は誰だ？」と聞く必要はなかった。「逃がしはしない！」と言う話の主人公だ。

厄介なことはごめんだと思い、電話の線を抜いた。にも拘らずまた電話が鳴った。私が思わず受話器を取ると、不安な女性の声が「あなたは私をボロ雑巾のように捨てるつもり？ずっと一緒にいるって約束したじゃない。日本にいる愛人のところに行くつもりなのね・・・」

私は受話器を置いて力なく電話を見た。

私は自分が誰かの小説の主人公の一人であることを感じ始めた。でも私は操り人形なんかではありたくない・・・いずれにしてもお母さんの依頼をこなすことにした。

ようやく私は日本へ行く飛行機に乗った。私の隣の座席にはあるヨーロッパ人の紳士が座っていた。フライトの前から彼は時々私を見てニヤニヤとしていた。

私は彼に「私の顔に何かかいてありますか？私たちは知り合いましたっけ？」と言った。

彼は「ことはあなたが考えているより複雑ですよ。実はあなたは存在していないんです。あなたは私の小説の登場人物に過ぎないので。」と言う。

私は「あなたは私にとって、単なる頭のおかしい人に過ぎない。東京までの長い時間あなたのたわごとを聞いているつもりはない。」

彼は「私の言葉を信じないなら、これでどうだ。特にあなたが東京に生きて到着する必要はない。」と笑って言った。「この飛行機を墜落させてみる？」

と言うが否や飛行機が大きく揺れ始めた。あたりから驚きの叫び声が沸き起こった。機内放送で「乗客の皆様へご連絡いたします。当機は大きなエアポケットの中を通過する模様です。座席にお戻りになってシートベルトをご着用ください。」

その男は「それともハイジャック犯に撃ち殺される役はどうだ？」と言った。

と言うが否や、飛行機の通路を数人の黒い皮ジャンを着ている長髪の男たちが、布に包まれた何か不審なものを持って操縦室のほうへ走っていった。

「それともスチュワーデスに毒殺されるほうがいい？」と彼は言った。横にスチュワーデスが立っていて私に微笑んで「コーヒーはいかがですか？」と言ってお盆にのったコーヒーを差し出した。そのコーヒーからは強いアーモンドの匂いがした。

青酸カリが入っているのだろうか。

「これで分かっただろう？私はあなたの日本の旅行を波乱に満ちた面白いものにしたいと思っている。」と彼は言った。

状況は把握できたが、どうするべきなのか私は頭をフル回転させ始めた。

私は「タバコなしでは集中できない。タバコを吸えるところに移動しよう。」と言うと「私の小説でお前はタバコは

吸わない設定だったが。」と言った。「あなたは私の全てを知っている訳ではない。他の作家の作品の中では私は愛煙家なのだ。」と私は答えた。

私たちは喫煙所に向かった。私たちが非常口のそばを通りかかったとき、私は両手で壁の手擦りを強く掴み、足で非常口の取っ手を渾身の力で蹴り下げた。

ドアが開いた！お別れの挨拶をするまもなく、私の同行者はドアの外に吸い込まれていってしまった。彼の後を追いかけるように毒入りのコーヒーとスチュワードレス、さらに不審物を持った黒い服の男たちがドアの外に飛んでいった。他の乗客や乗務員たちはベルトをしていたので席に残っていた。突然その非常口のドアが大きな音を発して閉じた。その時私は傀儡師から解放された操り人形の幸せを感じた。

これで私の日本の旅行は落ち着いたものになるはずだと思った。

ダビッド・グロスが最後に住んでいたところは西新宿にある“白い桜”と言う旅館だった。私はその旅館に泊まることにした。旅館に着くとフロントのカウンターの向こう側から丸顔の年配の女性が私に微笑んで「いらっしやいませ！」と言った。ロビーでは小柄な女性がモップがけをしていた。

私は年配の女性に「部屋はありますか？」と聞いてみた。部屋はあるようなので、必要事項を確認して部屋を借りることにした。

私はダビッドの写真を取り出して彼女に見せた「三年前頃にこの旅館を利用していたのですが見覚えはありませんか？名前はダビッド・グロスと言います。」

思わぬところから手が伸びてきて写真を奪い取った。掃除をしている女性だった。「そいつは人間のくずだ。そいつは妊娠した私を捨ててどっかへ逃げた。今私は彼の二歳の息子を女手一つで育てている。忘れることなんかできるもんか。」

私は彼女の手から写真をそっと取り戻し「で、今彼はどこに？」と静かに聞いた。

彼女は「そいつにどんな用があるの？」と言った。「彼のお母さんの依頼で彼を探しているんだ。」と私は答えた。

「そいつはここから消えて以来まったくの音信不通さ。」と彼女は言った。

今はこれ以上何かを知ることはできない、とわかり部屋に向かった。私は長旅の疲れでへとへとだったので早く横になりたかった。部屋の戸を開けると中はタバコの煙で窒息しそうなほどだった。パイプを持ったジョン・スミスが咳き込みながら肘掛け椅子で私を待っていた。私は先ず窓を開けた。「私を殺す気か。煙で窒息しそうだ。」と彼に言った。

ジョン・スミスは「ごちゃごちゃ言わず、新宿の歌舞伎町にある“金の竜”というパブに行くんだ」と言った。「そこで働いている田中陽子という売春婦を見つけて話をしてみるんだな。彼女はダビッドのことについて何かを知っているはずだ。」そう言うと彼は煙を残して部屋から出て行った。私はドアを閉めて大きなため息をついた。今朝成田に着いたばかりでとても疲れている。少し休みたいが、すぐに歌舞伎町に行かなければならないようだ。

誰かがドアをノックした。私がドアを開けると拳が私の顔をめがけて飛んできた。私はそれをまともに喰らって意識を失い床の上に倒れた。気が付くと二人の男が私の顔を覗

き込んでいた。二人のうち一人はゴリラのような男でランニングシャツ一枚を羽織っているだけだった。もう一人の男のほうはきちんとした身なりをしていた。

二人目の男が「坊や、ダビッド・グロスのことは忘れたほうがいいよ。もし君が忘れることができないなら、私たちが忘れさせてあげるよ！今のはほんのご挨拶に過ぎないからね。」と言い私に笑いかけた。私を殴ったほうの男が私のほうを見ながらニタッと笑った。獣のような雰囲気ですの男はさらにゴリラのように見えた。彼の先祖は間違いなく・・・

そうして彼らは部屋から出て行った。

事はそれほど単純ではないようだ。事の背後にはもっと深い何かがあるようだ。私はそれに興味がわき抑えることができなくなりそうだ。

私はすぐに起き上がることもできずしばらくそのまま横になっていた。顎がとても痛んで眩暈もしたが、私は陽子と言う女性を探す必要がある。

私は歌舞伎町まで、重い足をひきづりながら歩いて行った。

“金の竜”を探し出すのにはかなり手間取った。その店を探しているうちに、少し危険そうな場所に迷い込んでしまったようだ。薄暗い通りで危険なおいをさせた男達とほぼ裸に近い女たちが私の周りを囲んでいた。私はハイエナに囲まれたウサギになったような気分だった。

ようやく“金の竜”を探し出し、店に入った。かなり大きな店でカウンターの椅子に数人の女の子たちが金色のすその短いチャイナドレスを身にまもって座っていた。髪の毛

が角のように見える結い方をしていた。そのうちの一人を見て私には電撃が走った。彼女は私のみちこと瓜二つだ！私は店の隅のほうにある席に着いた。すぐに女の子の一人が私の許に来て「何をお飲みなられますか？」とかわいく微笑んで聞いてきた。私はビールを頼んだ。

みちこに似ている女性と視線が会うと彼女は私に微笑んで手を振った。私は彼女に手を振り返した。すぐに彼女はカウンターの席を立て、私のほうへ腰を振りながら近づいてきた。「一緒に飲んでもいいですか？」と言いながら彼女は私の隣に座り込んだ。

間違いない。これはみちこだ。

私は「みちこ、ここで何をしているんだ？」と言った。

「みちこ？私はゆみですけど。」

名前などこの際関係ない。彼女が自分をゆみと言うのならゆみで構わない。私は彼女のウィスキーを注文した。私は「ゆみ、この店に陽子と言う女が働いていると聞いたがどの娘か教えてもらえる？」と小声で聞いた。

「私のほうがあの娘よりずっといい女なのはどうして？なんで彼女に会いたいの？」

私は「陽子と話したいことがあるんだ」と言って二千元を彼女の手握らせた。ゆみ（みちこ？）は「彼女は上の彼女の部屋で休憩している最中だけど。ちょっと前に二人のお客さんの相手が終わったばかりだから。」

私はさらに財布から二千元取り出し「彼女の部屋に案内してもらいたいんだけど。」と言った。

ゆみは私の手からお札を素早く受け取って「行きましよう。」と言った。私は他の女の子たちの視線を感じながら、ゆみの後ろについて階段のほうへ向かった。二階に着くとそこは長くて暗い廊下で沢山のドアがあった。ドアの

向こうから笑い声やあえぎ声などが聞こえた。ある部屋のドアが少し開いていてそこから明かりが少し漏れていた。

「その部屋」とゆみが指差した。私はドアを少し開けて中を覗いた・・・私は中を見るや否やドアを閉めた。私にわかったのはダビッドの行方を教えてくれる別の人を再び探す必要があると言うことだ。部屋の中には若い女の子が見てはいけないような惨状があった。突然外からパトカーのサイレンが聞こえてきた。あちこちの部屋のドアから全裸、半裸の人々が出てきてそれぞれの女の後ろを追いかけていった。ゆみは私の腕を引っ張り「こっち！」と言って、あるドアを開けた。それは非常口だった。

私たちは外に出てかなりの距離を走って逃げた。

数十分後ゆみは再び「こっち」と言った。そして鍵を取り出し、ある入り口のドアを開けた。暗い玄関で靴を脱いで奥へ進むと広くて明るい部屋に着いた。そこは一介の売春婦などが住めるような家ではなかった。年配の女性が「ここには人を連れてこないと言ったでしょ。

富美の将来のことをきちんと考えて行動してるの。」

ゆみは「お母さん、この人は他の人とはわけが違うの。」と言った。「どういうことだい？」年配の女性は少し声の調子を低くして聞いた。

ゆみは「彼が富美の父親なの。」と言った。私は耳を疑った。

ゆみは「そっちがあなたの寝室で、トイレはそこ。それからシャワーを浴びるなら浴室はあっち。」と言ってそれぞれの部屋を指差した。そう言い終わると彼女はどこかへ行ってしまった。

私が目を覚ましたとき、あたりはすでに明るくなっていた。

私のベッドの傍らで、5歳くらいの女の子が私を見つめて立っていた。わたしが目を覚ますのを待っていたようだ。

白くて大きな髪飾りを着け、ピンクのワンピースに白のハイソックスという、いかにも『これからお出かけ』と言わんばかりの格好をしていた。

彼女は私が起きたのを見て、「私は富美。出かけるんだから早くしてね」といった。

私が疲れからボーっとしていると、

「もう！今日はあなたが私を動物園に連れて行ってくださるんでしょう？お母さんがそう言ってたんだけど。ご飯は台所のテーブルの上にあるから、早く食べてね。食べたらずぐに動物園に行くのよ。」

「お母さんは？」と私は聞いてみた。「もう仕事に行っちゃったよ」と富美は答えた。

富美が部屋から出ると、私は服を着替え、用をたして台所へ行った。

食卓の上にご飯と焼き魚、野菜を料理したものが置かれていた。「食べないの？」と私は富美に言った。「とっくに食べ終わってるわよ」。

「動物園はどこにあるんだい？」と私は出掛けに聞いた。

「もう！上野動物園も知らないの？ここからだ歩いて行けないから新宿から電車で行くの。新宿駅は分かる、あっちの方よ。」と言って小さなかわいい指で駅の方角を指差した。

私たちは新宿駅のほうに歩き出した。

途中二人組みの警官が警察手帳を提示しつつ私に話しかけた。「職務質問です。日本語はわかりますか？失礼ですが

パスポートを拝見させていただきますか？あと何故この女の子と一緒にその子との関係を説明していただけますか？」質問を始めた方とは別の警官が私の背後の方へスッと移動する。

一見穏やかだが、もう一人の方は何かがあればすぐにでも私を取り押さえられるように準備をしているようだ。

私はパスポートを取り出した。富美は「この人は私のお父さんです。今から一緒に動物園に行くところです。」と言った。

警官が私の顔を見つめた。

富美は彼女の小さい鞆からある紙を取り出して警官に手渡した。警官たちはその紙と私のパスポートを注意深く見て確認をしていた。

警察官が「ご協力ありがとうございました。楽しい一日をお過ごしください」と微笑んで言った。

新宿駅の前で、突然黒い車が私たちの前に止まった。私の二人の顔見知りのギャングが車から降りてきた。彼らは私たちに近寄り、「私たちが警告したにもかかわらず、君はまだあの人を探し続けているのか。今、君は警告を無視した報いを受けることになる・・・」と言った。彼らはポケットに手を入れた。突然富美は「私のおじさんは篠田翔太です。私に何かあれば彼があなたたちを殺しちゃうよ。」と言った

それを聞いてゴリラは後退りした。二人目のギャングは「何を怖がってるんだ？すぐ彼を捕まえろ！その篠田ってのは誰だ？」と言った。ゴリラは「俺はまだ死にたくない。お前も死にたくないければこの件からは手を引いたほうが良い。」と答えた。二人目のギャングは私をにらみつけながらも車に乗りこんだ。

私は動物が大好きだ。大学で勉強していたとき、学費を稼ぐためにしばらく動物園で働いたこともある。

私は富美と一緒に、長い間動物園を歩き続けた。白クマの前に止まったとき、富美は「私は白いクマが大好き。」と言った。白いクマは岩と池がある深い谷の様な所にいた。

「もし私があそこに落ちたら、あなたは私を助けてくれる？」と富美は聞いた。

「もちろん」と私は答えた。

突然彼女はそう高くない塀を乗り越えて、白クマの近くに飛び降りた。私と周りで立っていた人たちはなすすべがなかった。小さい女の子は岩の上に座ったが、大きな白いクマが彼女のほうに歩き始めた。私は思わず彼女の近くに飛び降り、彼女を抱きかかえてそこから登り出た。周りにいる人たちは皆私たちの方に近寄った。「どうしてこんなことをしたんだ？」と私は彼女を叱った。

富美は「私はあなたが、私の本当のお父さんかどうか試したかっただけ。」と答えた・・・

私は富美と一緒に、動物園の中の池の近くにあるカフェに座っていた。私はコーヒーを、彼女のためにはアイスクリームを注文した。池は蓮の葉で覆われていてその合間を鴨が行き来している。開けた辺りでは白鳥やフラミンゴなどが時折えさをついばむために水の中に嘴を突っ込む。

私はみちこ（ゆみ？）の本当の名前が知りたくなった。そこで富美に「お母さんの名前は本当は何ていうの？」

富美は「何でお母さんの名前を知らないの？」

私は続けられないほうがいいと思い、この話を打ち切った。私は彼女ともう少し仲良く食べに来打ち解ける必要があると感じた。

「富美はどんな歌が好きなの？教えてくれる」と私は言った。彼女は「ぽっぽっぽ はとぽっぽ豆がほしいかそらやるぞみんなでい。」と歌い始めた。私達は何度か一緒にその歌を歌った。

近くのテーブルでジョン・スミスがパイプの煙をくゆらせている姿が目に入った。彼は私にウインクをした。私は富美に「ちょっと待ってて」と言って彼のテーブルの席についた。

ジョンは「すぐ新宿の紀伊国屋書店に行ってナターシャを見つけたほうがいい。彼女はダビッド・グロスの居場所を知っている。」と言った。

十分後私は富美といっしょに上野駅に向かった。途中で彼女は金平糖を一袋買うようにと私にねだった。

紀伊国屋のロシア語セクションで、私は金髪の細くて若い女性を見つけた。私は彼女に近寄って囁くように「ナターシャ、私はダビッド・グロスを探しているのだ」と言った。彼女は大きい声で「はい、その本ならこちらにあります。どうぞ」と言って“アンナ・カレー二ナ”という本を開いて私に手渡した。本の中に一枚の紙切れが挟まれていた。そこには「危険！すぐにここを離れなさい。女の子が誘拐されないように気をつけなさい！」と書かれていた。私は急いで富美のいた方へ振り返ったがそこには富美はいなかった。床の上には富美のかばんが無造作に投げ置かれ、辺りにさっき買った金平糖が散らばっていた。私は一番近くの出口に向かって階段を駆け下りた。しかし、そこでも富美を見つけることができなかった。この新宿の紀伊国屋にはいくつかの出口がある。誘拐なら今から

私が全部の出口を探して・・・などとやってるのをじっと待っているはずがない。今ここで私が誘拐者を捕らえるのは不可能だろう。

何とかしなければならぬのは分かっている。だが私にはどうすべきか思いつかなかった。

突然私の前にジョン・スミスが現われ「情報を得たいなら日本には面白い案内所がいくつかある。中でもこれは私が特に推薦する場所だ」と言って私に一枚のチラシを手渡した。私はそこに書かれている住所を見て「誘拐された女の子を探すこともできるのか？」と聞いたが我らの探偵は既に姿を消していた。

ジョン・スミス推薦の“案内所”は山谷の中でも一際薄汚い建物の中にあった。入り口のドアは半開きの状態であった。私は中に入った。がらんとした部屋の中心にぼろを纏い頭をくしゃくしゃにしたままの老婆が座っていた。彼女は私を見てニタツと笑った。彼女は歯が二・三本欠けていた。私は「奇妙な案内者だな。」と内心思った。彼女はいきなり「十万円だね」と言った。

「十万円が何だって？」と私は聞いた。

「あんたのかわいい娘さんを見つけないだろうか、十万円は高くないぞ。値引きはなし、前金で払ってもらおう。」私が事情を説明する前に既に何の用件かを知っているくらいだ。情報屋としての腕は確かなのだろう。財布を確かめると十万円とちよつとの現金があった。私の財布の中身まで把握しているのだろうか。ともかく、こういう場合は素直に言うことを聞くべきだろう、そう思いながら、ほとんど全ての持ち金を彼女に手渡した。

彼女はお金を受け取ると、手振りで私に座るように示した。

その老婆は後ろから箱を取り出し、私の前にいくつかの線香を用意して火をつけ始めた。妖しい匂いと共に線香から紫や黄緑などの奇妙な色の煙が部屋に立ち込めた。頭の奥がキリキリと痛み眩暈がしてきた。何かの幻影が見えだした。金色の蠍が真っ赤なコブラと戦っている様子だった。蠍はコブラを攻撃して致命傷を与えようとするが攻撃は届かず、逆にコブラに食べられてしまった。しかし、勝ったように見えたコブラがのたうち始めた。やがて、コブラは痙攣し始め、ついには動かなくなった。真っ赤だった体は、燃え尽きた灰の様な色に変わっていった。

正気に返ると私はそこに一人ぼつんと取り残されているのに気が付いた。部屋のドアは入ってきた時と同じように開いていた。私は外に出た。まだ頭がくらくらしていた。幻覚は、はっきりと覚えているのだが私はその意味が分からなかった。この幻覚で私に何をしろと言うのだ。肝心の富美の居場所をつきとめるのに何かの役に立つとでも言うのだろうか？

多分、ナターシャが何かを知っているのだろう。私は再度彼女に会う方がよいと考え、近くの駅へ向かって歩き始めた。と、向こう側からナターシャが歩いてくるのが見えた。

私は彼女に駆け寄り「ナターシャ、君は富美の居所について何か知っているんだろう？」と問い詰めた。

ナターシャは「少し酔ってるふうに見えるけど、コーヒーでも飲んで頭をすっきりさせたほうがいんじゃない。」と言って近くの喫茶店のほうを指し示した。

私達はその喫茶店に入ってコーヒーを頼んだ。

私はナターシャに老婆と、それから私が見た幻について話した。

話を聞いているうちに彼女の顔から血の気が引いていった。

彼女は「“金の蠍”と“火のコブラ”は中国のシンジケートの中でも最も危ない組織です。もしその手の人間の作業なら私たちには手出しができません。」

突然私はあることを思い出した。私は富美が自分の叔父さんが何かの力を持っている人物であると言っていた。

私はナターシャに「篠田翔太と言う人物に心当たりはある？」彼女は「私だけじゃなく、皆が知っている人物よ。」と言った。

私は「どこに行けば彼と話をすることができる？」と聞いた。ナターシャは「“金の竜”と言うパブで田中陽子という女性と接触してください。」と言った。私は「彼女は既にこの世にはいない」と言った。

ナターシャは私に物知り顔で「この世界はそんなに単純じゃないのよ」と言った。

ナターシャの説明を理解できないながらも、私が再び“金の竜”を訪れたときは既に日が暮れかかっていた。

私が店に入ると金色のチャイナドレスを着た若い女性が私に近寄ってきて「いらっしやいませ。」そして小声で「私が田中陽子です。篠田様がお待ちです。私の後に付いて来て下さい。」と言った。

店の中をどう歩いたのか、やがて私達はある二人のがっしりした男たちが見張っている部屋の前に着いた。

部屋の中に通されると、中には迫力のある男が大きな机の向こう側に座っていた。両脇には、別の二人のボディガードが立っている。

事の次第を私は話し始めた。篠田は自分の姪っ子が誘拐されたと聞いたとき、怒りで顔が真っ赤になった。「ゴミは所詮ゴミに過ぎないな！これ以上汚い中国の連中と関わらなつもりはない。ばい菌は消毒してきれいにしないと。」彼は何箇所かに電話を入れて何かを急いで命令していた。そして部屋にいた二人に「兵隊を全部連れて行っても構わない。今後一切私の目にあいつらが入らないようにしてこい。どんな手段でも構わない。そこの旦那も一緒に連れて行け。」

三台の車に分かれて私達はある建物に乗り付けた。誰一人銃火器を手にしていないのに気がつき、私は「銃は使わないのか」と聞いた。「銃なんか必要じゃない。」と誰かが答えた。見ていると体格のよい男がドアに掌をゆっくりとした動きで当てると、ドアが吹き飛んだ。その直後全ての男たちが建物の中に入っていった。私も皆と行動を共にした。大きな広間に私達は着いた。そこには中国人たちが待ち構えていた。大勢の男たちが戦いはじめていた。ジャッキー・チェンの映画が好きな人にはたまらないくらい見ごたえのあるシーンだっただろう。私は素手の格闘技には心得がないので、顔に一撃を喰らって倒れてしまった。気を取り戻すと近くに階段があるのに気が付いた。私は富美はその先にいると感じ、その階段を駆け登った。扉を開けるとそこは廊下で左右にドアが並んでいた。このドアのどれかの先に富美がいるはずだ。私は静かに「ぼっぼっぼ はとぼっぼ 豆がほしけりや・・・」と歌い始めた。一つのドアの後ろから「・・・そらやるぞみんな仲良く食べに来い」と声がした。私はそのドアを開けた。富美は部屋の真ん中辺りに椅子に縛り付けられていた。彼女の紐を解いて彼女を抱きしめると富美は「お父さん、お父さん！」

と言って泣きついた。私は彼女を抱きかかえたまま窓から飛び降りて、その場からすぐに立ち去ることにした。十分も過ぎた頃、富美は落ち着いたのか「お腹がすいた。何か食べよう。」と言った。食べ物を売っている店を探しながらさらに数分歩いていると、二十四時間営業の蕎麦屋が見つかった。優しそうなお婆さんが私たちの様子を見て、通常よりも多く蕎麦を盛り付けてくれた。食べ終わるが否や富美は寝付いてしまった。どうしようか思案に暮れていると、その様子を察してかお婆さんが「お嬢ちゃんが寝てしまったようですね。しばらくここでゆっくり休んでいただいて構わないですよ。」と言ってくれた。朝日が上った頃私達は再び蕎麦を食べ、その店を出ることにした。私は富美に「お母さんと会わないとね。どこに行ったらいいと思う」と言った。富美は「お母さんなら鎌倉で待っているに決まっているでしょ。」と答えた。私は特に理由なども聞かずに鎌倉へ向かうことにした。

東京駅から私達は鎌倉行きの電車に乗った。私たちはボックスタイプの席に座り、向かいにはある老人が座った。数分経つと富美は「黙って座っているだけなんてつままないから何かお話でもしてよ。」と言った。私は「お話しって言われてもするような話なんてないな。」と答えた。

「鎌倉まで私が黙っておとなしく座っていれるなんて思っていないでしょうね？」

「悪いけど、今はお話とか作ってる余裕がない。」
突然向かいに座っている老人が私に微笑んだ後「お嬢ちゃん、私がお話をしてあげよう。」と話しかけた。それは富美の興味を惹いたようだった。

老人は話を始めた。「私は小さいとき随分と沢山、友達とチャンバラごっこをしていた。その中で私は一番小さかった。ある晩皆が私に、今からお前は番兵だ。交代の時間になるまでここで待っている。」と言ってある場所を指した。私は頷いた。それで私は長い時間ずっと一人で立っていた。彼らはもしかして私のことを忘れてしまったのかもしれないが、私は約束を破ることができないでずっと待っていた。やがて日が沈みあたりは暗くなってきた。私の先祖は武士で約束を破ることは恥ずかしいことだ。といつも言われていた。寒さと怖さで涙がこぼれてきたがそれでも私はその場所で待ち続けた。

突然ある年寄りの人が私の前に現われて「ここで何をしているんだ？」と私に聞いた。私は彼に状況を説明した。彼は「私は大老なのでお前を任務から解く。家に帰りなさい。だがお前の勇敢さに敬意を表してこれを授けよう。」と私に銀の小さい呼子を手渡した。「この呼子は本当に命に危険が迫ったときにだけ使いなさい。」

私はその呼子のことを長い間忘れていた。思い出したのは戦争の終わり間際のことだった。周りが火に包まれ家族みんな、母や妹たちと一緒に床の上で死を覚悟し始めたときふと呼子のことを思い出した。私はおもちゃ箱からそれを見つけ出して口に当てた。

突如銀の侍たちがどこからともなく現われて私たちを担ぎ上げた。どこをどのように通って行ったのか判らないが、彼らは私たちを森の中にある静かなところに連れてくると姿を消した。こうして戦争による私たち家族への惨禍は過ぎ去った。」

私達はその話の時を忘れて聞き入っていたようだ。

電車はもうすぐ鎌倉に到着するようだ。私はその老人に「面白いお話をしていただいてどうもありがとうございました。とても上手にお話をお作りになりますね。ロシアにも似たような話があったのを思い出しました。」と言った。富美は先ほどのお話の内容について何かを考えているようだ。突然彼女は「その呼子はどうなったの?」と言った。老人は銀の小さい何かをポケットから取り出し「私にはもうこれは必要がない。あなたにお譲りします。あなたにこそこういうものが必要になるでしょう。」と言って彼女に手渡した。富美は驚嘆に満ちた表情でそれを受け取った。老人は一言「使うときは判るよね。」と言った。私達は微笑んでいる老人を残して席を立った。

駅のプラットホームに降りるとみちこを見つけた。

「お母さん!」と富美は叫んでみちこの方へ走り寄った。みちこは富美を抱きあげた。彼女たちには私の存在が見えていないようだ。こんな状況では私は単なる邪魔者なのだろうか。その様子を見ていると私は私の後ろで誰かの咳を聞いてタバコの臭いを感じた。「こんにちは、ミスターミス!」と私はいった。彼は渋い表情をしたまま「すぐ長谷寺に向かうんだ。そこでダビッドの情報を得ることができるはずだ。」というと彼は私に背を向けて立ち去った。私達はその寺に急ぐことにした。

途中弁当屋の脇を通りかかったとき、みちこは「何か食べるものをここで買っておきましょう。」と言った。私は特に反対する理由もないので、そこで美味しそうな弁当を買った。

寺に着くとみちこはお地藏様に手を合わせ始めた。富美は母親の行動を見て「お母さん、何をしているの?」と言った。

「お母さんはね、拝んでいるのよ。」

「拝むってどういうこと？」

「お願いすることよ。」

「お母さんは何をお願いしたの？」

「家族のみんなが幸せでいれるようによ。」

それから富美は、お母さんの様に手を洗って、手を合わせ、目を閉じて、囁き始めた。

ある年寄りの僧侶が私たちに近寄ってきた。「この娘の名前はなんといいますか？」とその僧侶は口を開いた。みちこは「この子は私たちの娘で富美といいます。」と言って彼の顔を見つめた。

僧侶は「その女の子が手を合わせたときに、お地藏様が微笑むのが見えたのだ。おそらくその子は特別な運命を背負っているのだろう。だがあなたたちにはまた別な問題があるようだ。おそらく私が何かの役に立てるでしょう。」と言った。

みちこは私の方を見つめた。私は「私はある人を探しています。彼の居場所を特定することができますか？」と言ってみた。

「ないものを探し出すことは私であっても不可能だ。」

そう謎めいた言葉を残して僧侶はその場から立ち去った。私はそのことの意味が分からず困惑した。私がそのことについて考えをまとめようと意識を集中し始めたとき、富美が私の袖を引っ張って「お腹がすいた。お弁当を食べようよ。」と言った。二人に引きずられるように私も展望台に向かった。私達は弁当を食べるためにテーブルを囲んで座った。近くのテーブルでは他の訪問者たちも何かを食べる準備をしていた。一風変わった注意書きが貼られているのが目に入った。

「トンビに注意。食べ物を狙っています。」と注意書きには書かれていた。実際にその注意書きの上のほうで大きな鳥が飛んでいた。周りの人たちは弁当を隠すようにしていた。私たちも弁当を守るようにし始めたところ、ある人が「弁当なんかよりも娘さんを守らないと大変なことになりますよ。」と言った。

みちこは声の主のほうへ顔を向け「ここで何かあったんですか？」と聞いた。

その人は「少し長くなりますが、ここであった出来事を知っておいたほうがよいでしょう。」と言って、私たちを見つめた。

私とみちこは少しの間見つめあった後、彼のほうを向いて肯いた。

「太郎という少年が親といっしょに上野の西に住んでいた。」そう言って彼は話を始めた。

上野の西に太郎は親と一緒に住んでいた。彼が四歳だった時、とても飛行機を怖がった。

太郎は飛行機のぶんぶんいう音を聞くと走って行ってテーブルの下に隠れた。親は戦争の時代に生きていた誰かの魂が太郎の心の中に入ったと思っていた。

でも彼は七歳になったとき、何も怖がらなくなっていた。太郎の先祖の中にはたくさんの勇敢な侍がいた。

彼の家の客間の壁に、一枚の古い写真がかけられていた。写真の中の人、母の祖父で大戦中のゼロ戦のパイロットであった。彼は戦争の終わりに大きな敵の軍艦を沈めた。本当に勇敢な人物だった。太郎は彼の名にちなんでつけられた。

太郎はその先祖と心の結びつきを感じていた。ほとんど毎日、その写真の前に立って何かをつぶやいていた。

先祖の太郎のような勇敢な人物になるために、彼は空手を習い始めた。

太郎の家の隣に、久美子という小さい女の子が住んでいた。彼女は五歳だった。太郎は久美子とよく一緒に遊んでいた。太郎は小さい久美子を大きな犬やいじめっ子などから守ってあげた。久美子はしょっちゅう太郎にいろいろなお菓子を持ってきた。

家族ぐるみの付き合いで、時々一緒に短い旅行などをしていた。ある日、彼らは鎌倉に旅行に行った。

阿弥陀如来像が安置されたお寺の辺りを散策していた。お腹がすいたのでお弁当を食べるためにテーブルを囲んで座った。近くに一風変わった注意書きが貼られていた。

「トンビに注意。食べ物を狙っています。」と注意書きには書かれていた。実際にその注意書きの上のほうで大きな鳥が飛んでいた。みんな弁当を隠すようにした。

突然大きな鷲が石つぶてのように、とても素早く空から降りてきた。そして小さい久美子を掴んで飛んでいった。誰も何もすることが出来なかった。鷲は小さい久美子をつかんだまま山のほうへ飛んで行ってしまった。久美子の親は大変なショックに見舞われて警察に連絡をした。鎌倉の警察は署をあげて久美子の捜索に当たったが、手がかりさえ見つけることが出来なかった。

がっかりした哀れな親はなすすべもなく、ともかく家に帰った。

太郎は泣かなかった。彼の心は憤慨していた。彼は帰ったときすぐに先祖の写真の前に行って何かをつぶやき始めた。激情のゆえに彼の目からは涙が流れ始めた。

すると太郎は、その写真の人物の目からも一粒の涙がこぼれ出たのに気がついた。長い間太郎は写真の前で祈った。彼は気がつかないうちに居眠りをしてしまった。夢の中で写真の太郎が彼の前に現われた。先祖の太郎は「久美子を助けたければ、朝早く鎌倉に行って阿弥陀如来のお寺を見つけなさい。君の貯金箱の中にあるお金で十分なはずだ」と言うと彼はいなくなった。

翌朝太郎は貯金箱からお金を取り出し、学校に行くそぶりをして上野の駅に行った。京浜東北線を見つけて電車に乗り、品川で横須賀線に乗り換えて鎌倉に向かった。鎌倉の駅を出て、バスに乗って阿弥陀如来のお寺についた。

しばらく太郎はお寺の周りを歩いていたが何もなかった。突然、歳を取ったお坊さんが彼の前に現われた。「君の困っていることは知っている。久美子は生きているけれど彼女を助けるのは簡単ではない。あの鷲は本当の鷲ではない。それはアメリカを支配する思念である。久美子の先祖の一人は、人間魚雷に乗り込んで敵の戦艦を沈没させた。その鷲が自分の息子を久美子と結婚させれば、彼は日本全土を掌握することが出来る。それをとめることが出来るのは君だけだ。困難に打ち克つためにこれを持っていきなさい」と言って太郎にお守りを差し出した。

さらにお坊さんは太郎に森に続く狭い道を指して「その道を最後まで行きなさい。」と言っていなくなった。

その道を太郎は歩き続けた。道はだんだん陰しくなった。いばらでズボンが引き裂かれ腕や足に擦り傷が出来た。やがて大きくてきれいな家が太郎の前に現われた。その家の庭で久美子はある金髪の男の子と遊んでいた。彼はカウボーイの帽子を被っていた。マイケル・ジャクソンの歌が

流れていた。金髪の男の子は大きくて強そうだった。彼は飛行機の模型で楽しそうに遊んでいた。太郎はそれを見つめたとき、それがB-29の模型であることがわかった。太郎の祖母の家族は、東京大空襲のときに焼け死んでいる。祖母は家族の中でたったひとりの生き残りだった。大嫌いなB-29を見たとき太郎は何も考えず庭に入った。太郎は大きな男の子に近寄った。太郎の怒りに満ちた目つきに威圧されて金髪の子はあどすさった。「ダディ、ダディ！」と男の子は叫んだ。

すぐに大きくて強そうな男性が家から庭に出てきた。彼は笑って言った「久美子はわなに過ぎない。お前をおびき出すためだ。今から私の復讐が始まる」。

彼は太郎ににじり寄った。太郎はお守りを握りしめた。すると二人の間に先ほどの歳を取ったお坊さんが現われた。

「私たちの寺の修行僧は鍛錬を積んで今ではみんな居合い抜きの人となっている」。

「居合い抜きとは何だ？」とアメリカ人は聞いた。そして彼はゆっくりと拳銃を坊さんのほうに向けた。

「こういうもんだ！」とお坊さんは言った。その瞬間、アメリカ人は真っ二つになっていた。「居合い抜きも知らないで日本を支配できると思っていたのか。」

「すごい、居合い抜きのことも習わなければならないとな」と感心した太郎は思った。

太郎は久美子と一緒にその家を出た。「どうしてこの山の神様は、ここにこんな人間の家があることを許しているのだろうか？」とお坊さんに聞いたとき、突然子供たちは空からぶんぶんという音を聞いた。青空から翼に赤い点がある小さい銀色の飛行機が飛んできてその家に突っ込むのが見えた。

忽然と家は目の前から消えた。

太郎は久美子を彼女の親のもとに連れ帰った後、家に帰り先祖の写真の前に向かった。

感謝の気持ちで、先祖の太郎に祈った。

心なしか写真の太郎が、良くやった、偉いぞと微笑んでいるようにみえた。

「・・・微笑んでいるように見えた。」と彼は話を終えた。

私達は弁当を食べるのも忘れて彼の話に関心していたようだ。みちこは富美を強く抱きかかえた。

「そしてこの物語が起きたのがこの場所なんですよ。」と彼は言った。

弁当を食べ終わった後、私達はその寺の周りを歩き回った。すると、森につながる小道を見つけた。

富美は「この道を行こう。もしかしたら太郎はこの道を歩いたのかもしれないね。」と言った。

私達はその道を歩いていると、ふと、誰かが私たちの後をつけているような気配を感じた。振り返ってみると、怪しげな男の姿が見えた。もしかしたら彼らは単に私たちの後ろにいただけだったのかもしれないが。

とにかく、私と富美は昨日の夜ねていなかったのでうつらうつらしてきた。

突然私たちの前にある古い旅館が姿を現した。

「こんなところに旅館なんてあったかしら？」とみちこは言ったが、「そんなことはどうでもいいじゃないか。疲れているんだ、さあ入ろう。」と私は言った。

旅館の中に入ると、「いらっしゃいませ。」とお婆さんが言った。「お部屋は用意できています。どうぞ、後につい

ていらしてください。」私達が部屋に入ると、何人かの男の客の声が聞こえた。もしかしたら彼らは、さっき私が見た男かもしれない。しかし、疲れていたのも、お風呂の後私達はすぐ眠りに落ちた。

私は夢を見た。二人の鬼が話している夢だ。鬼の一人が言った。「あの女の子がいるから、俺はこの部屋に入れない。あの子には目に見えない力があるから、俺は何にもできない。」もう一人の鬼が言った。「じゃあ、あの男たちはどうなんだ?」「もう俺が食べてしまった。」朝になって目が覚めた。

私は森の木の間に横たわっていた。そこは旅館などではなかった。辺りには、骨が散らばっていた……。

みちこと富美の姿は無かった。代わりに近くには狐の親子が折り重なるように寝ていた。

木の枝の折れる音がした。そちらの方を向くと、木の間にナターシャが立っているのが見えた。彼女は片方の手の人差し指を自分の唇の前に立てながら、もう一方の手の指先で私に彼女の方へ来るように手招きした。

私が彼女に近づくと、彼女は非常に小さい声で「これ以上日本にいと命の保障ができないわよ。ここにイスラエルに帰るためのチケットがあるから、それをもってすぐに成田に向かいなさい。あそこの木の裏手にジョン・スミスが車を暖めて待っているわ」と言った。

私は「ここに私の妻と娘がいるのだから、この地を離れるわけには行かないだろう。」と言った。

ナターシャは「そこにいるケモノがあなたの家族だとでもいう気なの? 正気に返るのよ! とにかく危険で仕方がない状況なんだから、バカなことをやってる暇はないのよ」と言った。

「何と言われようと私は愛する家族を捨てるつもりはない。」

「へえ？ そうなの？」と彼女は笑って私の目の前に彼女の手を近づけた。私は気が遠のいていった・・・

意識が戻ると私は飛行機の中にいた。機内放送が「まもなく当機は離陸を開始いたします。ご搭乗の皆様にご再度シートベルト着用をお願いを申し上げます。ご協力ありがとうございます。」と言うのが聞こえた。

離陸？ なせ私が飛行機の座席に座っているのだ？

私はなぜここにいるんだ？ 驚きが隠せなかった。

私がどうしようかとうろたえ始めると、周りに銀の鎧を着た大柄の侍たちが現れ「この男を飛ばさせるわけには行かない。彼には私たちと一緒にいくところがあるんだ。」と彼らは言って私を担ぎ上げた。意識が混濁し始め、正気に戻ったときには、私はみちこの家の部屋に戻っていた。

そこでは、みちこと富美とジョン・スミスとナターシャの四人が話しをしていた。ジョン・スミスは椅子に座りいつもの如くパイプを吹かしていた。ナターシャは彼の隣で立っていた。みちこと富美はソファに腰掛けている。

ナターシャはみちこに言った「あなたは単なる脇役に過ぎないのに、いったい何様のつもりなの？ この小説のシナリオでは主人公はイスラエルに帰ることにしてあるのよ。何だってその筋の邪魔をするの！」

みちこは「彼は私の夫なんだから、私と一緒にここに残るのが筋ってもんでしょ。」と言った。

富美は「誰かが私のお父さんをどこかへ連れて行こうとしているの？」と言うと、銀の侍が周りの壁から抜け出してきた。

刀の柄に手がかかっているのを見てジョン・スミスは「ちよつ、ちよつと待った・・・歩み寄りの余地はある・・・」

侍たちはそれを聞いて、再び壁に戻っていった。

私は私が小説家なのか、それともナターシャとジョン・スミスの書く小説の主人公に過ぎないのか少し自信が無くなってきた。

いや！ここで弱気になってはいけない。私こそが小説家なのだ。

突然男性が部屋に入ってきた。私は彼の顔をどこかで見たことがある。

「私を覚えていないのですか？」と彼は言った。

「ダビッド・グロス、あなたはまだ見つからない。消えてください！」とナターシャは厳しく言った。その男性は消えた。

私は「でも私の部屋の上に住んでいる彼のお母さんは・・・」と話し始めた。

「あなたの部屋の上には、若い女性が住んでいます。毎晩彼女のハイヒールの足音が聞こえています・・・」と微笑んでナターシャは言った。

今私は、みちこと富美と一緒に新宿で幸せに暮している。私達は休日には動物園に行つて白いクマを見ることにしている。私たちの生活は平穏なものとなった。

そこで私は再び小説を書くために筆を取ることにした・・・

東京の法律

私はエルサレムの大学で物理学を専攻しているが、物理と日本語を同時に勉強しているのは私一人だけのようだ。

私になぜ日本語や日本が好きなのかと聞かれても答えようがない。私にもその理由は分からないからだ。

大学にはあきらという私ととても親しい友人がいる。彼は日本人だ。私もあきらも二十歳だ。あきはイスラエルが好きで、ユダヤ文化について学んでいる。

ある日私達は一緒にテレビで東京についての特集番組を視聴することになった。画面の中を若い女性たちが自転車で通り過ぎていく姿が映されていた。

私は彼女たちの姿を見て「美しい、こんな女性なら誰とでもいいので結婚したい」と口から言葉が漏れた。

あきは笑いながら「その程度の夢ならすぐに叶えることができるさ。東京には面白い決まりごとがあるんだ。ある独身女性が自転車で男性にぶつかってしまった場合、その女性は相手の男性と結婚しなければならないんだ。」と言った。

私は「本当か！それなら今すぐにでも東京に行くぞ。」と言った。言うや否や私は東京に行く準備をし始めた。時間を無駄にするつもりはない・・・

ある朝私は親と一緒に台所で朝ごはんを食べていた。私の父親は弁護士として働いているので私は「東京の法律」と「国際結婚」のことについて彼の意見を聞いたかった。私は母親にも日本人の女性と結婚することについて考えを聞いておきたかった。

「お父さん、国際法のことについて詳しい？」

「もちろん。」と彼は答えた。

「私は日本人の女性と結婚するつもりなんだけど、どう思う？」

母親は「どこかに頭でもぶつけたの？イスラエルには女性がいなくてでもいうつもり？」と言った。

「お母さん、日本の女性は美しいし、子供たちはとてもかわいい。そう思わない？」

「イスラエルの女性であっても問題は沢山あるのにさらに問題を増やすつもりなの？日本人の恋人でもできたってことなの？」と母親は心配そうな声で聞いた。

「まだ日本人の恋人はいないけど、これから日本に行ってみつけるつもりなんだ。」

母親は父親のほうを向いて「黙ってないであんたも何かいいなさいよ！」と言った。

父親は笑って「日本のきれいなお嬢さんがお前を迎えてくれるとかって考えているわけじゃないだろう？どうやって日本の若い女性と知り合いになるつもりなんだ？」と言った。

「『東京の法律』のことについて知っている？それを利用すればきっと上手くいくよ。」

父親は「『東京の法律』？なんだそれは？」と言った。

私はあきらから聞いたことを父親に説明した。

両親はお互いに見つめ合っていた。やがって二人はお腹を抱えて笑い始め、数分間の間笑いを止めることが出来なかった。私には何がそんなにおかしいのか理解ができなかった。

ようやく両親は落ち着いた。父親は真面目な表情で「確かにそんな法律が東京にはある。お前の計画は素晴らしいと思う。応援するからがんばってこい！」

両親の期待を背負って私は日本に向かうことになった・・・

数日後、私は東京の通りに立っていた。

私はことがそれほど簡単にはいかないことにすぐに気がついた。きれいな女性は自転車の扱いがとても上手で人にぶつけるようなことなどはまずありえないからだ。

ある日ある通りで私が写真を撮りながら道を歩いているときのことだった。右を向いてはそちらに向かったり何か面白いものや美しいものを見かける度に不意に立ち止まってそれを眺めたりカメラを向けたりしていた。突然何かが私の腿の辺りを打ちつけた。

そして「ガシャン」と言う音とそれに続いて女性の悲鳴が聞こえた。私がそちらを向くとそこには倒れた自転車と女性が転んでいた。私はすぐにその女性を抱き起こした。「大丈夫ですか？」と私は言った。彼女は「ええ、大丈夫です」と答えた。その女性は若くてかわいい顔をしていた。ポニーテールにジーンズとブラウス姿だった。目には涙を湛えていた。

私は「私の所為ですね。すみませんでした。」と言った。彼女は「私の不注意です。すみません。」と決まり悪そうに言った。幸いなことに彼女は軽いうち傷程度で済んだようだ。

私たちがぶつかった場所はスターボックスの前だった。私は「代金は私が持ちますのでそのカフェで少し落ち着きましょう。」と言った。

私達は中に入って席に着いた。私は彼女が同意して一緒に来てくれたことがうれしかった。どうやら彼女の名前はけいこというらしい。私達はアイスコーヒーを飲んで少しずつ落ち着いてきた。

私は「もし私のことが気に入らないなら無理して私と結婚する必要はないです。」と言った。けいこは驚いた顔をして「結婚する必要？あなたと？何のことですか？」と言った。「『東京の法律』で自転車で誰かにぶつかったら、その人と結婚することになっているでしょ。」

けいこはさらに怪訝そうな表情をして「どこからそんな法律を引っ張り出してきたんですか？」と言った。

「私は日本人の友達から、東京ではそうなっていると聞いたんですけども・・・違うんですか？」

けいこはしばらく私を見つめ、やがて微笑んで「実はその法律は存在してはいるのですが、皆が知っているものではないんです。」

私は「あなたがとても気に入りました。もしあなたが私を気に入ってくれたのなら結婚しましょう。日本の人は法律を遵守すると聞いています。」

けいこは笑いをこらえながら「そのとうりですね。今晚私は、私の親にあなたを紹介したほうが良いみたいです。今晚七時に渋谷のハチ公前で会いましょう。」

私は彼女と待ち合わせの約束をして、これほど上手くいくとは思ひ、とても幸せな気分だった！

私がハチ公前に着いたときけいこは既にそこで待っていた。彼女はきれいに着飾っていた。とても機嫌のよさそうな表情をしていた。

私達は駅の近くのレストランに入った。そのレストランは大きくて高そうなレストランだった。

ある席に二組の年配の夫婦と若い男性が座っていた。

私たちがその席に近づいたときけいこは笑って私の腕に彼女の腕を絡ませながら「こんばんは」と言った。一組の夫

婦と男性が無言のまま席を立てて出口の方へ向かった。別の夫婦が彼らを追いかけて「申し訳ございません。」といいながら何度も頭を下げていた。

けいこは私に「取りあえず座って何か食べましょう。」と言った。

後から立った夫婦が戻ってきたとき、私達はご馳走を堪能していた。

その年配の男性が「けいこ、何回私たちに恥をかかせるつもりだ。お前の振舞いが妹たちにどんな影響を与えるかもっとよく考えろ。」と怒鳴った。彼は私をチラッと見て「その外人は誰だ？」と問い詰めた。

けいこは「彼が私の結婚相手です。」

彼は「結婚相手？どこの馬の骨とも分からないやつじゃないか？」

けいこは「東京の法律によると、私は彼と結婚する義務があるのよ。」と言った。

「東京の法律？なんだそれは？」

けいこの両親は私たちの説明を聞いた後顔を見合わせ、首を小さく横に振った。

けいこは早口で「皆がその法律を知っているわけではないわ」と言った。

「何をバカなことを！」

突然、先程出ていった方の年配の男性が数人の若者たちをつれて入ってきた。彼はけいこの父親に近づいて「人に恥をかかせておいて無事にことがすむなどと考えるなよ。」と言い、私の方を向いて「これは俺たちの問題だ。命が惜しければこの場からさっさと立ち去れ。」

私は「これは俺の問題そのものだ。知らないかもしれないがイスラエルの特殊部隊は捕虜を捕らえるようなことはし

ない。その意味は分かるだろ！俺はその部隊員の一人だ。

」

それを聞いて相手の年配の男性はけいこの父親に「これで終わったと思うなよ。まだかたは着いていない。」そう言
って彼らはレストランから出ていった。

けいこの父親は私に「本当に君は特殊部隊の一員なのか？」と聞いた。私は微笑んで「まさか。軍役についてのことすらありませんよ。」

彼はけいこに向かって「彼と結婚しろ。」と言った。

私が日本人の妻を連れてイスラエルに戻ったとき、私の両親は「東京の法律」が如何に効力のあるものかを理解したようだ。

時折私とけいこと一緒に遊びに出かけると、私の母親は孫娘ゆみの面倒を見る幸せな祖母へと変身する。

あきはどうしたのでしょうか？

あきは「東京の法律」の結果を見て、すぐに東京へ飛んでいった。自転車に乗っているきれいな女性を探すためだ

日本から愛を込めて

「お客様、どうかなさいましたか？」

薬局の女店員が尋ねた。

「子供が生まれたんですね。たまにあることですよ。必要なものはすぐに揃いますから。そんなに心配しないで。」私は感動と緊張で震えていた。それは女店員が考えたこととはまったく違っていた。実は、私は今朝、私の家のドア横で泣いている赤ん坊を見つけたのだ。

この赤ん坊はどうやってここに来たのだろうか。

トキコのことを思い出すまでに数分かかった。ここからそう遠くないところに住んでいて半年前に引っ越していった女だ。トキコは小柄で美しいが、だらしない生活を送っている日本人の女だった。そしてある日私のベッドで目覚めた。

私がこの赤ん坊の父親なのだろうか。わからない。違うかもしれない。しかし、そんなことは重要ではなかった。この美しく雪のように白い小さな日本人の子供はすでに私の腕の中にいた。この子をユキ、日本語で雪という意味である、と名づけた。(私はロシア軍を除隊後、大学で日本語を学び、ロシアでの‘人生’では、日本語通訳として働いていた。)

私はどこかの誰かに、このかわいい赤ん坊をゆだねることも、警察に行くこともまったく考えなかった。

私はこの子をすぐに自分の娘とみなした。

しかしこの子に何をすればいいのだろうか。考えるまもなく隣人に電話した。彼女はイレーナ・セルゲイブナという名のそれほど若くないロシア人の女で、私と同じ建物に住んでいた。私は彼女がどうして、そしてどのようにしてイ

スラエルに来たのかは知らなかった。彼女はやせていて、肌も透けるように白かったが、強く安定感のある目と権威ある声の持ち主だった。

イレーナ・セルゲイブナは啞然とも、驚きもしなかった。彼女はまったく自然に、赤ん坊を手に取り、私に “必要なものを買いに” 薬局に行かせたのだった。

「乳児用ミルクと哺乳瓶、それにおしめを忘れないようにね。」

と彼女は日常的で簡潔な響きで言い、

「お金はあるんでしょう？」

と付け加えた。

私が、突然日本人の赤ん坊の父親になったと聞いたとたん、「汚い日本人女に引っかけたのね…」と私の恋人は怒鳴りだした。

そしてすぐに私の人生からいなくなった。私は幾重もの凍えるようなイスラエルのお役所仕事をくぐり抜け、この子を正式に養女にすることに成功した。これはまさに奇跡と言ってもよい。イレーナ・セルゲイブナは特に忙しい女性ではなく、赤ん坊を育てる私の手助けをしてくれた。私は忙しく働き、そして家に帰ると、すべての時間をこの子とすごした。イレーナ・セルゲイブナは私の家族の一員となっていた。そしてユキにとっての本当の家族はといえば、悲しいことに、この時点ではすでに存在しなかったのである。そして私たちはこのように生活していたのである。

「アレックス、この子には母親が必要ですよ。あなたは結婚しなくてははいけませんよ。この子はもう三歳になるんですよ。」

ある日イレーナ・セルゲイブナは言った。

もちろん、彼女は正しかった。私にもわかっていた。だから誰かふさわしい女性を探した。しかし、女たちは、ユキの存在を知った途端にいなくなった。誰もイスラエルで日本人の子供を育てたくはなかったのだ。

私はユキには日本人の母親が必要だ、と最終的な結論を出した。

エルサレムには、私たちにとって適切な日本人女性がいなかった。大学で学んでいる数人の学生、アメリカ人の金持ちの夫を夢見るセックス狂の女たち。ほかにも日本人女性はいたが、誰かの妻たち…すべて適切ではなかった。ふさわしい日本人女性は、日本で探さなければならなかったのだ。

インターネットで出会い系サイトやチャットを見つけ、探し始めた。

もちろん誰にも子供のことは話さなかった。主に軽いおしゃべりとともに自分のことを話した。誠実な男だと。

長い間、考えに見合う人を見つけることはできなかった。あの日、エミコに会うまでは。

竹田一郎は近所の人が思っていたようには、農林水産省で働いてはいなかった。ここ十年の間、彼は日本の諜報機関の、計画実行部隊の指揮を執っていたのである。森本紘子もまた、彼女の母親が思っていたようには、広告代理店で働いてはいなかった。彼女は、最も複雑で責任ある任務をこなす熟練した諜報員だったのである。

今日、そのような任務のひとつを受けるために彼女はヘッドオフィスに招集された。

隊長のオフィスに入る際、彼女は一礼をした。

「失礼いたします。」

「おう、久しぶり。」

隊長は応え、

「元気だったか？」と続けた。

ようやく彼は目の前の書類から視線をはずし、若い彼女のほうへ目を向けた。

絃子を見る度に、彼は神戸での、あの恐ろしい震災で亡くなった彼の妻であったユミ、後期で繊細だった妻を思い出すのである。

「絃子ちゃん」

彼はいつも優しく、家庭的な温かみを持って彼女に話しかける。

「今夜、イスラエルに飛んでもらうことになった。」

彼女は緊張を隠せなかった。日本に住んでいたイスラエル人と彼女との、数年前に悲しい結末で終わった激しい恋愛を竹田は知っていた。残念なことに、すべて終わったことである。イスラエル人は突然祖国に帰り、絃子を苦しみに置き去った。現在まで心の傷は癒えておらず、時々彼女は独り夜に泣いていた。

「一週間後に中国人物理学者の一行がイスラエルを訪れる。そのうちの一人がこいつだ。」

隊長は、絃子に写真を手渡した。

「彼は物理学者でも中国人でもない。彼は北朝鮮のスパイで殺人犯だ。彼はパレスチナ人への核爆弾の契約書を携行している。しかし、それは私たちの目的ではない。

我々と彼には他の因縁がある。彼は去年ソウルで我々に少くない問題を起こした。」

絃子はそれが何であるか知っていた。去年ソウルで、日本の諜報員が数人死んだのである。

「我々は中国では彼に接近することができない。ましてや北朝鮮では。イスラエルで接近するしかない。彼を殺して戻ってこい。期間は一週間だ。」

唐突に隊長は笑みを浮かべ、

「この任務は非常に変わった状況下でおこなわれる。」

彼はインターコムを押して言った。

「田中君、入ってきたまえ。」

間もなく部屋に非常に若い将校が入ってきた。通常の挨拶を交わし、紘子の顔を見たとき、なぜか彼の顔は紅潮した。

「田中君、報告してくれ。」 竹田は命令した。

「半年前、」

咳払いの後、田中は始めた。

「日本の出会い系サイトに、日本語を完璧に話すイスラエル人男性が現れました。彼は日本の若い女性と知り合いになろうとしていました。私は、隊長の命令の下に、彼とエミコという名前で交信し始めました。」

彼は紘子のほうをチラッと見て、再び顔を紅潮させた。

「これがその交信記録と、その人物の写真です。」

彼は礼をして、隊長にバインダーを手渡した。

「もう下がっていいぞ。」

隊長は話を締めた。

田中がドアを閉めた後、竹田隊長は写真をバインダーから取り出し、笑みとともに彼女に差し出した。

「これがその男だ。エミコちゃん、君は彼のところに行くのだ。フライトは今晚だ。彼はテルアビブ空港で、君と会うことになっている。彼は君の外見を知らないし、声も一度も聞いたことがない。ここ最近の交信記録から判断すると、彼は君を見ることさえしないのに、君にどうしようもな

く恋をしているらしい。そして君が来るのを首を長くして待っている。」

紘子は長い間写真を見つめていた。

「任務終了後には、彼を消さなければならないのは言うまでもない。」

隊長はドアをあごで示した。 — 任務説明は済んだのだ。

紘子は一礼をして、隊長の部屋から出て行った。

アレックスは、チェチェンで狙撃手として兵務していたことを、出会い系サイトで自慢した際に日本の諜報機関の視野に入ってしまったのである。最初は彼を徴用しようと考えられていたが、事がこのように速く進展したため時間が足りず、この作戦を知らさないまま、彼を使うことに決められたのである。

今日、イスラエルの諜報機関のとある部隊の朝礼に、アジア人の風貌をした誰も知らない男が一人出席していた。

「この人は、イーガル、モサドからの我々の友人だ。」

ニッシムが彼を紹介すると、皆が笑みを浮かべた。モサドの“友人”には本名はない。

「すぐに彼が興味深い話をしてくれるぞ。イーガル、どうぞ。」

イーガルは軽い訛りのあるヘブライ語で話はじめた。

「明日、テクニオン大学の招待により、中国人物理学者の一行がこの国を訪れる。そのうちの一人が、ワン・リーだ。我々の情報ソースによるとワン・リーは物理学者でも中国人でもない。彼は北朝鮮の諜報員、パク・チェンだ。彼は北朝鮮からパレスチナ人への武器売却の契約書を持ってく

る。どうやら、中距離ミサイルか核爆弾らしい。パレスチナ人は核爆弾へはどのような対価でも支払うつもりでいる。皆も知っているように使い道があるからな。一方、北朝鮮は飢餓状態下にあり、金が必要だ…」

少しの静寂のあと、ニッシムが言った。

「我々は、このパク・チェンを尾行しなければならない。我々は彼を消すことはできない。なぜなら、彼は“中国数物理学者”であり、我々は中国とは既に十分な問題を抱えているからである。しかし、パレスチナ人と彼との取引を白紙に戻すことは断然可能である。誰がこの件を処理するかを決定し、次の事項に移ろう。」

ニッシムはイーガルに聞いた。

「他に付け加えることはあるかな？」

「はい、友好的なソースから、なぜか日本の諜報機関が彼、パク・チェンを追っているという情報を受け取った。既に日本は二度にわたって彼を消そうとしたらしい。しかし、二度とも失敗に終わっている。イスラエルでも、今回も実行しようとするかもしれない。」

「可能性は低いが、とにかく我々は彼の保護には回らないし、ましてや万が一彼に何かあった場合、彼の死を悲しむことも我々はしないだろう。」

飛行機はベングリオン空港に着陸した。絃子は入国管理審査を難なく通り、出口に向かった。彼女には任務は難しいこととは感じられなかった。ただ、彼女は、交信記録に窺える彼の人物と写真が気に入り、男を殺す気がおきなかった。

アレックスはエミコに会うにあたり、子供と彼女とを紹介する、最良の方法について長い間迷っていた。写真も見

ずに、若い女性をここに招待したことは早急すぎることで彼は知っていた。もちろん、エミコの外見は気にかかっていたが、エミコは自分のことを“細い”そして“かわいい”と書いていた。しかし、その後ろには何が隠されているのだろうか。ほとんどの日本の女性が“細い”し“かわいい”のである…もし彼女が不細工だったら？そしてもし、お互いのことが気に入らなかったら？

「アレックス、大丈夫よ、そんなに心配しなくても。」
イレーナ・セルゲイブナは彼を安心させるように言った。「最悪の場合、彼女はしばらくの間あなたのところで過ごして、日本に帰ればいいのだから。」

エミコを迎えるためにユキを空港に連れて行くことに決まった。

「すぐに決まるだろう。」とアレックスは考え、イレーナ・セルゲイブナは彼に同意した。

しかし、誰が来るのかをどのように子供に説明しようか。さらにもうひとつ問題があった。実際のところ、ユキは日本人女性に会ったことも、接触したこともなかったのである。初めての日本人女性であるエミコの到来に、どう反応するだろうか。

イレーナ・セルゲイブナは素早く、いつものように決然と行動した。

「私たちのところに、とてもやさしいお姉さんがくるんだよ。」

彼女はユキに伝えた。

「お父さんと一緒にその人に会いに行きなさい。もしおまえがそのお姉さんのことを気に入ったら、その人がおまえのお母さんになるんだよ。」

イレーナ・セルゲイブナの話した大胆な内容から立ち直ったアレックスは、いつものように子供のために日本語で訳して伝えた。彼は、ユキが日本語をロシア語と同じ位理解するよう努力しており、すべてを二つの言語で説明していた。

紘子は飛行機の搭乗者の中で唯一の日本人だった。だからアレックスにはすぐにその人が彼女だとわかった。突然の幸福に心臓が喜びに打ち震えた。彼女は美しかったのである。

ユキは父親の腕に置かれている大きな花束の隙間から覗いていた。紘子を見た瞬間に、ユキは、彼女が“やさしいお姉さん”なのだとわかり、アレックスの腕から離れた。

紘子もすぐにアレックスを見つけた。彼が腕に小さな日本人の女の子を抱いているのを見たとき、彼女はその場で固まり、驚嘆した。複雑で厳しい決断を下すことのできる経験ある熟練の諜報員が、今混乱し、どのように対応すればよいのかわからなかったのである。

ユキはすぐに彼女の元へ「おかあさん！おかあさん！」と叫びながら走って行った。そして、そのとき、どう対応すればいいのかわからない諜報員紘子は、すぐに何をすればよいのかよくわかっている普通の女としての紘子へと変わったのである。彼女はこのかわいい女の子を抱き上げ、優しく抱きしめた。

「わあ、可愛い。お名前は？」

紘子は囁いた。

今まで知らなかった何かが、彼女の喉にこみ上げ、彼女は喋ることができなかった。涙が頬を流れだした。突然の感情の昂ぶりに、紘子は泣いていた。

その朝、私たちはナハラット・シブアにあるイタリアンカフェに行った。ユキはエミコのひざに座り、アイスクリームを一心不乱に舐めていた。その顔は幸せに満ちていた。エミコは子供を優しくなでながら何かを彼女の耳に囁いていた。イレーナ・セルゲイブナと私は、彼女たちから目をそらすことができず、取り憑かれたたように見つめていた。私たちは、エミコが来てからたった四日しかたっていないのに、何年もこうやって共に生活してきたような理想的な家庭を垣間見る思いだった。

「お母さんね、ちょっと一時間位あなたとお別れしなきゃならないの。」エミコが言った。

「一時間くらい？」ユキが聞いた。「どこに行くの？」

「お友達に会わなきゃいけないの。彼女に会ったら、すぐに帰ってくるわ。さびしいと思う間もないわよ。」

「アレックス、ほらそこに中国人労働者があんなに集まっている。いったい何をしているんだろうね。」イレーナ・セルゲイブナは窓を見て言った。

私は彼女の目線を追って、通りの方を見た。カフェの入り口の横に、作業服を来た中国人が何人か立っている。イレーナ・セルゲイブナの言ったことを日本語に通訳してエミコに伝えた。エミコも窓の方を見た…彼女は極端に様相を変えて震えだし、まるで小さくなったかのようなだった。目つきが厳しくなり、顔つきが石のように固くなった。ユキは何か恐ろしいことが起こっていることを理解したのか、母親の方へ問うような目線を向けた。

「イレーナ・セルゲイブナにユキをすぐに家に連れて帰るように言ってちょうだい。」

エミコは慎重かつ冷静な声で言った。

「どうかしたのか？」

私は聞いた。

「あの人たちは中国人じゃないわ。」

エミコは言った。

「北朝鮮の諜報員よ。私を連れに来たの。」エミコは言った。

「何のことを言っているんだい？ どういうことだ？」

「ここはすごく危険だわ。イレーナ・セルゲイブナは早くここからこの子を連れてって。」

イレーナ・セルゲイブナは日本語での応酬を、注意深く緊張した面持ちで聞いていた。そして、私とエミコに問いかけるような視線を送った。彼女は何か重大なことが起きているのを悟ったのだ。

「イレーナ・セルゲイブナ、窓の外にいる人たちは彼女を連れに来た北朝鮮の諜報員で、ここに残るのは危険だとエミコは言っている。ユキを連れて家に帰ってくれないか。私…私は何がなんだか分からない。」

「なにを理解する必要があるんだい？」

イレーナ・セルゲイブナは感情を爆発させた。

「あなたのエミコは日本のスパイで、彼らは、彼女を殺しにここに来たんだよ。彼女はあなたのことを隠れ蓑として利用しただけだよ！…私たちみんなを騙したんだよ。」

イレーナ・セルゲイブナはこの日本人の女に怒りの目をむけて言った。

「少なくともこの子には情けをかけたんだね。」

「なんて言ったの？」エミコは素早く聞いた。

私は通訳した。

「すべて事実よ。」エミコは言った。

「??？」

私は何も言えなかった。エミコがスパイだって？
イレーナ・セルゲイブナは急に黙り込んだユキを抱き上げた。
「アレックス、気をつけて。彼女を信用しちゃいけないよ…心配しないで、この子は大丈夫だよ。私がこの子を守るから。」
彼女は日本人の女を振り返ることなく、カフェから出て行った。
彼女とユキが中国人労働者(もしくは北朝鮮のスパイ?)の横を通り過ぎたとき、そのうちの一人が、彼女たちの後を気づかれぬようにつけていった…

「エミコ、何が起きているか私に説明してくれ。」
「アレックス、私はエミコじゃないの。私は日本の諜報員。名前は絃子。」
彼女は私の目をまっすぐ見た。そして私は、彼女がいま言ったことがすべて真実だと悟った。
「この任務を開始したとき、あなたを愛してしまうなんて知らなかったの。ユキの存在も知らなかった…」
彼女は私の手をとって続けた。
「あなたを愛しているの…私、本当にあなたをとて愛しているの。お願い、信じて。もし、ここから生きて出られたら…私、証明して見せるから…」そう言った後絃子は黙った。彼女は涙を止めることができなかった。
窓の外の朝鮮人を見た。全員がこちらをじっと見ていた。
「君はここで何をしなきゃならないんだ？君はここに何のために送り込まれたんだ？なぜあの朝鮮人たちは君の後を追っているんだ？」

「彼は北朝鮮から、パレスチナ人への核爆弾の売却契約書を持って来ているの。」

核爆弾がパレスチナ人の手に渡るだって！絃子は正しい。彼等を消さなければならない。

「私が君の手助けをするよ。」

絃子に言った。

「どうしたらいいんだい…なにをすべきなんだ？」

絃子は微笑み、私の手を握り締めた。

「私はここから脱出することができないわ。」

彼女は窓をあごで示した。

「あなたはシオン門まで走って行って。そこに私の仲間の一人が待っているわ。絃子があなたを送ったと彼に伝えてちょうだい。何をすべきかは彼が説明してくれるわ。」

「どうやってその人を見つければいいんだい？」

「すぐに判るわ。彼は日本人よ。」

「君はどうするの？」

「心配しないで、あの朝鮮人たちが私を捕まえることはできないから。」

「愛しているよ。」

私は彼女に言った。

「しっかり、愛しい絃子。がんばれよ。」

私は席を立ち、調理場から非常口へと向かった。

イレーナ・セルゲイブナはゆっくりと家の方へ歩いていった。彼女はユキの（と）手をつなぎ、彼女に何かを話していた。子供は注意深く話を聞き、時折質問をするために彼女をさえぎった。

彼女達からそう遠くない後ろには“中国人労働者”がゆっくりと歩いていた。

チョン・ハイ諜報員は単純な指令を受けていた。それは、女と子供を殺し、いる可能性のある追手を撒き、最初から決められていた場所で、残りの仲間と合流することであった。彼の右手には刃を袖に隠したナイフの柄が握られていた。チョンは静まり返った裏通りを見ると、歩調を速め、素早く彼の獲物へと向かって行った。彼女たちとの距離が数メートルまで近づいた時、彼は行動に移した。その瞬間…

女がさっと振り向いた。雷のような速さで、彼女は右手で彼の喉元に手刀を入れた。チョンは手を動かしたり声を出したりする間もなくその場に倒れ込んだ…それはKGB諜報員養成学校の指導部隊長であった、イレーナ・セルゲイブナのもっとも得意とする攻撃だった。彼女はユキの方へ素早く振り返り、倒れているチョンを彼女の体の影へと隠し、微笑みながら大きな声で話しかけた。「早く行きましょう。おうちにとってもおいしい物があるんだよ。」

シオン門の近くには誰もいなかった。歩道にそう大きくない白い“トヨタ”が停められているだけだった。私はその車に近づいていった。車には運転手である若い日本人男性が座っていた。というより、彼は前部座席でほぼ横たわっている状態だった。私は車のドアを開けた。その青年は青白く、目を閉じており、彼の服には血のシミがついていた。

「どうしました？大丈夫ですか？」

私は彼に声をかけた。彼は目を開けると、数秒間私の方を凝視し、突然笑みを浮かべた。

「アレックス…」

彼は小さい声で言った。彼はどうして私の名前を知っているのだろうか。しかし、躊躇している間はなかった。

「紘子にここに来いと 言われたんだ。」

日本語で彼に答えた。

「彼女は来ることができない。私が代わりにしなければならぬことをする。」

青年は私の方を見て、目を伏せて言った。

「聖墳墓教会... その二階の礼拝堂... 十一時ちょうどに彼は教会から出てくる。」

私は時計を見た。十一時十分前。急がなければ。

「あのさ、」

彼は目を開け、私の方を皮肉な目で見ながら、突然小さな声で言った。

「君とメール交換をしていたのは僕だ... 僕がエミコだ...」

彼の頭がうなだれ、彼はとうとう意識を失った。

私の頭の中ではすべてが混沌としていたが、今これらを明白にする時間はなかった。十一時に間に合うように全力で走った。

とうとう聖墳墓教会の崩れかけはじめている古い礼拝堂に着いた。一息に二階まで飛ぶように駆け上った。

しかし、そこには何もなかった！

「ああ！ そうだった、彼らの言う二階とは、私たちの三階なんだ。」

とひらめき、さらに続く階段を急いで上っていった。そこには、壁の割れ目に光学スコープを装着した狙撃銃が置かれていた。

十一時を知らせる教会の鐘が鳴り出した！

私は銃を掴むと安全装置をはずし、教会の門へと向けた。

私の手は少し震えていた。そう、今までの走りのせいで。しかし選択の余地はなく、失敗は許されなかった。今、大切なのは呼吸だけだ。穏やかで、深く、落ち着いた呼吸…突然、教会の高い門が開き、まったく似かよった五人の中国人が出てきた。同じ顔、短い髪型も同じ。五人とも全く同じ白いシャツ、灰色の背広を着てネクタイを締めている…

いったい誰が北朝鮮のスパイなのだろう？

躊躇している暇はなかった。もし、パレスチナ人が核爆弾を手に入れたら…

ああ！私が刈ってやる！こいつら中国朝鮮人等を五人とも！

銃の照準を合わせた。

しかし、突然二人のアラブ人が中国人の一人のもとへ走って来た。笑いあい、握手しあい、お互いに肩をたたきあいだした…

「やるな、日本人！」

ニッシムはととても満足そうに言った。

「結局、彼等はいいつを仕留めたな。あの野郎を。」

「日本人ではありません。」

副隊長のガビが答えた。

「なに！」

「銃には、我々の一員の指紋が残っています。ほら、見てください。」

ガビはニッシムに幾枚かの書類を渡した。イスラエル国防軍で兵役した者の指紋がそうされるように、アレックスの指紋もまたイスラエル諜報機関のファイルに残っている。

「逮捕しますか？」

ガビは尋ねた。

「どうして逮捕するんだ？核爆弾からイスラエルを救ったからか？」

「しかし、かれは日本の諜報員ですよ！」

ニッシムは笑みを浮かべるだけだった。

「ガビ、日本人に何の恨みがあるんだ？今晚は‘さくら’に行こう。寿司を食べたことがあるかい？この男のことをもう少し知りたいな。」

「紘子ちゃん、君の旦那さんのことをもう少し知りたいよ。」

と竹田隊長は言って、悪戯気に目を少し細めた。

「ところで、彼は日本で何をするつもりなんだい？」

「彼は東京大学で日本文学を学びたいと言っています。」

「日本文学？そうか…君たちの娘はどうしてる？ユキっていったよな？」

「ユキは元気になっています。隊長、弟が生まれるんです。」

紘子をゆっくりと眺めた竹田の目に、小さな炎が宿った。紘子がドアを閉めて出て行くと、彼は電話をかけて言った。

「紘子はしばらくの間参加しない。パリに行くのは山田だ。」

それは命令だった。約半時間後には、山田はすでに隊長のオフィスで必要な説明を受けていた。

竹田一郎が家に帰ったとき、イレーナ・セルゲイブナは彼の一番好きな料理であるすき焼きを作り終わっていた。

もちろん、彼女は本物の日本の妻である“家内”になったわけではないが、彼女は夫にロシア女だけが与えることのできるものを与えた。

そして、侍、竹田一朗は毎夜笑顔の下でロシアを征服しているのだった。